Microsoft

Book of News

Microsoft Ignite 2020

日本語

Microsoft Book of News

PDF translations for the Book of News are now available to assist in reading content in languages other than English. Please note that translations may not always be exact and should be used as a n approximation of the original English language content.

Frank Shaw による序文

Book of News について

1.Azure

1.1 Azure AI

1.1.1 Azure Cognitive Search の更新:プライベート エンドポイントとマネージド ID

1.1.2 Azure Cognitive Services の更新:Metrics Advisor プレビュー、Spatial Analysis プレビュー、Anomaly Detector GA

1.1.3 Azure Machine Learning の更新:デザイナー、自動 ML GA など

1.1.4 Microsoft Bot Framework および Azure Bot Service の更新

1.2 Azure Data

1.2.1 Azure Cache for Redis が新しいユース ケースを導入し、キャッシュを改善する新しい 2 つの製品層を開発者に提供

1.2.2 Azure Cosmos DB が、小規模なワークロードでのデータベース運用のためのサーバーレス オプションを提供

1.2.3 Azure Database for MySQL と Azure Database for PostgreSQL が、選択肢、パフォーマンスおよびスケールを向上させる柔軟なサーバー展開オプションを提供

1.2.4 Azure SQL が、ゾーンの冗長性を汎用データベースに拡張することで耐久性を強化

1.2.5 IoT ゲートウェイやデバイスに最適化された Azure SQL Edge が一般提供を開始

1.2.6 Azure Synapse と Power BI による使用量ベースの最適化

1.2.7 ビッグ データおよび AI ワークロードを高速化する、Photon を使用した Delta Engine for Azure Databricks のプレビューを発表

1.2.8 最終アクセス時刻のライフサイクル管理

1.3 Azure データセンター

1.3.1 より多くの Azure リージョンに展開された可用性ゾーン

1.3.2 Azure Orbital が、衛星データおよび機能へのアクセスを提供することでコスト削減と効率性の向上を実現

1.3.3 Azure Resource Mover が、リージョン間の複数のリソースの移動を簡素化

1.3.4 Azure 仮想マシンのゾーン間の障害復旧が利用可能

1.4 Azure Dev とエコシステム

1.4.1 .NET 5 リリース候補版が利用可能

1.4.2 Azure App Service の更新には、新しいコスト削減オプション、Windows コンテナーのサポート、GitHub Actions の統合が含まれる

1.4.3 Azure Communication Services を使用して、Microsoft Teams と同じセキュアなプラットフォームでリッチなコミュニケーション体験を構築可能

1.4.4 Azure と Datadog の統合

1.4.5 Azure Kubernetes Service (AKS) の更新に、クラスターを簡単に一時停止してコストを節約し、大規模なポリシーを適用する機能が追加

1.4.6 Azure Spring Cloud が Steeltoe 開発フレームワークをサポート

1.4.7 GitHub Codespaces と、Visual Studio および Windows ベースのコードスペースが新たにサポートされたことで、どこからでも生産的な作業が可能に

1.4.8 Logic Apps が新しいホスティング オプションを更新し、パフォーマンスと開発者ワークフローが改善

1.4.9 Private Azure Marketplace をパブリック プレビューで提供

1.5 Azure Hybrid、Azure Infra、Azure Migrate

1.5.1 Azure Arc 対応サーバーと Azure Arc 対応データ サービスを備えた任意のインフラストラクチャで Azure サービスを実行

1.5.2 大規模なバックアップ管理を実現する統一されたエクスペリエンスと、新しいリソースとアプリケーションに拡張された Azure Backup 機能を提供する最新のバックアップ センター

1.5.3 Azure Compute と Azure Disk Storage の新機能と拡張機能

1.5.4 Azure Kubernetes Service (AKS) on Azure Stack HCI をパブリック プレビューで提供

1.5.5 Azure Migrate が新しいエージェントレス ソフトウェア インベントリと依存関係マッピングを発表し、移行を簡素化

1.5.6 新しい Azure Spot 仮想マシン機能と Azure Advisor スコアでワークロードのコストを継続的に最適化

1.5.7 新しい Azure Stack のフォーム ファクターとサービスが、強力なコンピューティングをエッジで拡張し、高度な分析を実現

1.5.8 次世代 Azure VMware ソリューションの一般提供を開始

1.5.9 新機能により、Linux を Azure に簡単に移行

1.5.10 Windows Server ワークロードに最高のエクスペリエンスを提供する、Azure でのみ実現可能な新しいイノベーション

1.6 Azure IoT

1.6.1 新しい Azure Certified Device プログラムにより互換性が保証され、市場投入までの時間を短縮

1.6.2 AT&T が初の Azure Sphere セルラー保護デバイスを市場に投入

1.7 Azure MR

1.7.1 HoloLens 2 が新市場に出荷。パートナーは Azure Kinect DK 用の Microsoft 3D Time of Flight ディープ技術を搭載したデバイスを構築可能。Azure Mixed Reality サービスのポートフォリオに、Azure Object Anchors を追加

1.8 Azure Networking

1.8.1 Azure のネットワーク拡張機能に、Azure Virtual を備えた Cisco SD-WAN および Global Load Balancer 機能を追加

1.9 Windows 仮想デスクトップ

1.9.1 リモート ワークの導入を促進する、新しい Windows 仮想デスクトップ機能

2.ビジネス アプリケーション

2.1 パワー プラットフォーム

2.1.1.Microsoft Power Automate Desktop は、ユーザーにロボット プロセスの自動化を提供

2.1.2.データ インサイトへのアクセスを強化し、競争力の高い価格設定を実現するために、Teams の Power BI と新しい Power BI Premium Per User を更新

2.1.3.プロフェッショナルな開発者を対象に、Power Platform のローコード アップデートを GitHub と Azure にパブリック プレビュー

2.2 Dynamics 365

2.2.1.新しい Dynamics 365 の音声チャネルにより、コンタクト センター業務を効率化

2.2.2.新しい Dynamics 365 Supply Chain Management ツールにより、製造および倉庫業務の常時稼働が実現し、リアル タイムの在庫表示が可能

2.2.3.Dynamics 365 Project Operations は、サービス事業向けの完全なクラウド配信ソリューションを提供

3.イノベーションと業界クラウド

3.1 イノベーション

3.1.1.新しい Microsoft Premonition Early Access Program により、感染症の流行が広まる前に検出することが可能

3.1.2.Open Data Campaign レポートで、データ共有を活用して差し迫った世界の課題に取り組む方法を提示

3.2 イノベーションと業界クラウド

3.2.1.初の業界特化型のクラウドである Microsoft Cloud for Healthcare を 10 月末に提供開始

4.Microsoft 365

4.1 Cortana

4.1.1.Microsoft Teams、Outlook、および Windows 10 で Cortana の機能を強化

4.2 Excel

4.2.1 Excel ユーザーは、ライブ Power BI データセットに接続して、ピボットテーブルやその他のツールを利用可能

4.3 インサイトとウェルビーイング

4.3.1.Microsoft Teams と Outlook の新しいウェルビーイングと生産性に関するインサイトと機能

4.4 IT Pro

4.4.1.Microsoft Endpoint Manager が、オンプレミスのリソースにリモート アクセスできる Microsoft Tunnel、ビジネス向け共有 iPad、Windows 仮想デスクトップなどのサポートを導入

4.4.2.Office 展開のパブリック プレビューで利用可能な新しい管理機能とツール

4.4.3.生産性スコアでは、10 月の一般提供に先駆けて 3 つのカテゴリーを追加

4.5 Outlook

4.5.1.刷新された UI と機能の更新を取得するための予約

4.5.2.Outlook の新しいモバイル機能拡張により、柔軟性と制御性が向上

4.5.3.新しい Outlook for Mac は Microsoft Sync 技術を採用し、OS の更新をサポート

4.6 Project Cortex

4.6.1.高度な AI を使用して理解を促進する企業向けコンテンツ管理の SharePoint Syntex を導入

4.7 Microsoft Search

4.7.1.新しい Microsoft Search がイノベーションが、どこからでも利用可能に

4.8 SharePoint および Yammer

4.8.1.新しい Microsoft 365 ツールが職場のコミュニケーションをサポートおよび強化

4.8.2.Yammer で知識を共有し、専門家同士のつながりに大きな役割を果たすクラウドソーシング

4.9 Microsoft Stream

4.9.1.新たに設計された Stream により、Microsoft 365 のビデオ共有が簡素化

4.10 Microsoft Teams

4.10.1.Microsoft Teams に新しい通話機能がまもなく登場

4.10.2.チームのチャットとチャネルの会話を強化することで、コミュニケーションを効率化

4.10.3.新しい Microsoft Teams の体験がコラボレーションを向上させ、会議を改善

4.10.4.電子カルテの統合により強化された Microsoft Teams での仮想医療

4.10.5.重要な業務のデジタル変革が加速する中、Microsoft Teams の新機能が第一線で働く人々を支援

4.10.6.ハイブリッドなワークプレースをサポートする新たな会議室体験

4.10.7.Microsoft 365 の新機能により、Teams がコラボレーションのためのより便利なハブに

4.10.8.Microsoft Teams の Power Platform が更新され、ローコードのアプリ、ボット、および自動化されたワークフローをより簡単に利用可能

5.セキュリティ、コンプライアンスおよび ID

5.1 セキュリティ

5.1.1 Microsoft Defender が Microsoft 365 と Azure 全体を脅威から保護

5.1.2 Microsoft 365 が Application Guard と Office を統合し、ユーザーの生産性と保護を維持

5.2 コンプライアンス

5.2.1 次世代の Compliance Manager により、コンプライアンスを合理化してリスクを軽減

5.2.2 新しいコネクタや API による Microsoft 365 のコンプライアンス エコシステムの拡張。Microsoft Cloud App Security (MCAS) に拡張されたデータ損失防止機能のパブリック プレビュー

5.2.3 Advanced eDiscovery を含む、Microsoft Teams に追加される追加のセキュリティおよびコンプライアンス機能

5.3 ID

5.3.1 ID

5.3.2 Azure のセキュリティ

6.Windows、Edge およびデバイス

6.1 Windows

6.1.1.更新により、C# .NET5 開発者が Windows ランタイム コンポーネントを構築することが可能に

6.1.2.新しい MSIX 機能により、アプリの開発と更新を簡素化

6.1.3.クラウドフレンドリーな Windows アプリ開発を可能にする NuGet パッケージ

6.1.4.React Native for Windows の最新バージョンで、デバッグなどがより容易に

6.1.5.Windows Subsystem for Linux の新機能により、パフォーマンスが向上し、インストールが容易に

6.1.6.Windows Terminal の新機能により、生産性が向上し、ナビゲーションが簡単に

6.2 Edge

6.2.1.Microsoft Edge がパブリック プレビューで Linux に登場。セキュアなリモート作業のサポートが強化され、開発者は Microsoft Edge を任意の Windows アプリに導入することが可能

6.2.2.Microsoft Edge では、証明書ベースのデジタル署名の検証や将来のリコールのためのメモの追加など、PDF の変更を予定

6.3 デバイス

6.3.1.Surface Hub 2S:85 インチ モデルの更新と提供開始

Frank X. Shaw による序文

コミュニケーション担当副社長

ここ太平洋岸北西部では秋が目前に迫っていますが、私たちはなんとかこの世界の現状に適応しています。Ignite 2020 では、世界中の IT 専門家に知識を伝え、インスピレーションを与えるテクノロジーの祭典を 2 日間にわたって開催します。この場を借りて、困難な状況の中で組織を存続させるために尽力してきた人々のコミュニティに敬意を表したいと思います。

ご存知の通り、Ignite Book of News はすべての発表のガイドとなるものです。

私たちの目標は、すべての最新情報をわかりやすくご案内し、重要な詳細情報を入手できるようにすることです。9 月 22 日と 23 日に開催されるデジタル イベントの Ignite では、世界中の IT 専門家をはじめとする多くの人々にご参加いただき、クラウド、開発者、セキュリティ、生産性、コラボレーション ツールなど、次世代のテクノロジーをご紹介します。

この Book of News には、Microsoft 365 および Microsoft Azure のクラウド プラットフォーム全体のニュースが掲載されており、AI、データと分析、複合現実などに関する新しい技術を組織やコミュニティにお届けします。この困難な時期に、Ignite が好奇心を刺激し、世界に影響を与えるテクノロジーをご紹介できることを嬉しく思います。

Ignite 2020 版の Book of News をお楽しみいただき、ぜひご意見をお聞かせください。ご意見をお待ちしています。ありがとうございました。

Book of News について

Microsoft Ignite 2020 Book of News は、Ignite で発表される主要なニュースをご案内するガイドです。情報解禁されていない報道のため、PDF 版の Book of News を公開しています。さらに、情報が解禁された際には Book of News をよりインタラクティブかつ簡単に閲覧できるように、ライブサイトもご用意しました。コンテンツのページをスクロールする代わりに、目次から目的のアイテムを選択できるようになります。PDF とライブ サイト制作との間で更新が行われる可能性があるため、最新のコンテンツを確実に入手するには、9 月 22 日 (火) 8:00 AM (太平洋標準時) からオープンする Book of News のライブ サイト https://aka.ms/AA9q0p6 をご利用ください。新しい変更が、必要なすべての情報、経営幹部によるインサイト、および背景の理解に役立つことを願っています。

Book of News の内容についてご質問がある場合は、こちらのフォームにご記入ください。エントリーごとに入力することも、すべての質問をまとめて入力することもできます。

1.Azure

1.1 Azure AI

1.1.1 Azure Cognitive Search の更新:プライベート エンドポイントとマネージド ID

Azure Cognitive Search の 2 つの新機能 (ともに一般提供されています) は、検索サービスのデータに安全にアクセスし、信頼できるサービスとして登録するために役立ちます。

プライベート エンドポイントを使用すると、インデクサーは Azure 仮想ネットワーク (VNet) の背後にあるデータ ソースに接続できます。また、Azure Cognitive Search にリクエストして、送信プライベート エンドポイント接続を作成し、インデクサーを介してデータ ソースのデータに安全にアクセスすることもできます。

さらに、マネージド ID は役割ベースのアクセス制御 (RBAC) 割り当てを提供し、インデクサーとデータソース間の安全な接続を実現します。また、構成の一部としてデータソースの資格情報を入力しなくても、データソースに接続できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.1.2 Azure Cognitive Services の更新:Metrics Advisor プレビュー、Spatial Analysis プレビュー、Anomaly Detector GA

Azure Cognitive Services は、意思決定、視覚、音声の範囲にわたる一連の新機能を導入します。意思決定カテゴリーでは、Metrics Advisor プレビューが指標を予防的に監視して問題を診断する新しいサービスです。Metrics Advisor は Azure Cognitive Services の一部である Anomaly Detector を基盤に構築されており、売上から製造オペレーションまで、ほぼリアルタイムでのモニタリング、シナリオへのモデルの適応、診断とアラートによる詳細な分析を提供する強力な組み合わせを通じて、組織の成長エンジンのパフォーマンスを監視します。

また、一般提供されるようになった Anomaly Detector を使用すれば、高度な異常検出を本番レベルのデプロイに適用できます。

視覚カテゴリーでは、Computer Vision の機能である Spatial Analysis が、人の動きと存在をほぼリアルタイムで把握して、物理的な空間の価値を最大化できます。これにより、部屋にいる人の数を数えたり、顧客間の距離を測定したり、店舗への来店者数を集計したり、店頭ディスプレイの前での滞留時間を把握したり、行列の待ち時間を決定したりできるアプリを作成することができます。この機能は、厳格な倫理基準と責任ある実装に関する指針に基づいて開発されたものであり、社会的距離やその他の健康コンプライアンス対策をサポートする室内レイアウトを作成することで、組織の営業再開を支援するために適用できます。

音声カテゴリでは、コンテナを使用する展開環境に関わらず、より多くのお客様が音声サービスを利用できるように機能を強化しています。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.1.3 Azure Machine Learning の更新:デザイナー、自動 ML GA など

Azure Machine Learning は、ビジュアル ツールやデータの前処理機能に加え、セキュリティ機能を追加したことで、モデルの構築とデプロイをより容易にする新機能を提供します。これにより、データ サイエンス チームは、これまで以上に簡単にカスタム モデルの開発ができるツールを利用できるようになります。

現在、一般提供されているデザイナー機能は、データの準備、モデルのトレーニング、評価など、多数のタスクにドラッグアンドドロップ モジュールを提供します。自動化された ML UI 機能を使用すると、分類、回帰、予測などの一般的なユース ケースに対応した予測モデルを構築してデプロイすることができます。

ML 支援のラベル付けを使用すると、お客様は自動化された機械学習を適用してラベリングを高速化できます。また、Azure Machine Learning 機能の一連のセキュリティおよびエンタープライズ対応機能の新しいセットがプレビューで利用できるようになりました。新しいオペレーション レベルの RBAC (役割ベースのアクセス制御) セキュリティ サポートにより、ML プロジェクトを詳細に制御できるユーザーは、カスタム ロールを設定したり、事前に構築された役割を再利用したりして、ワークスペース内の個々のユーザーの特定の操作を制御できます。

ML のライフサイクル管理のオープン ソース プラットフォームである mlflow と Azure ML の統合では、クラウドへのジョブ送信、モデル レジストリ、モデル展開サポート、および実験 UI 機能の拡張などがサポートされています。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.1.4 Microsoft Bot Framework および Azure Bot Service の更新

GitHub で公開されているビジュアル ボット開発用オープン ソース ツールの Bot Framework Compose により、Virtual Assistant Solution Accelerator 内で使用するスキルを簡単に構築できるようになりました。

さらに、開発者はこのツールを Power Virtual Agent 内で直接使用して、迅速にスキルを構築し、Power Virtual Agent ボットを拡張できるようになりました。

Azure Bot Serviceでは、Alexa チャネルが一般に利用できるようになり、開発者が 1 つのボットを構築し、人気チャネルにデプロイすることがさらに簡単になりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.2 Azure Data

1.2.1 Azure Cache for Redis が新しいユース ケースを導入し、キャッシュを改善する新しい 2 つの製品層を開発者に提供

Azure Cache for Redis のパブリック プレビューでは、現在、以下の 2 つの製品層が公開されています。Enterprise および Enterprise Flash です。Redis Labs とのパートナーシップで開発されたこれらの製品層は、Redis labs の技術と主要なクラウド プラットフォーム間の最初のネイティブ統合を表しており、開発者に、データ分析などの新しいユース ケースを解放し、キャッシュを以前より大きく、信頼性の高いものにするための新しいデータ構造と展開オプションを提供します。

この機能には、RediSearch、RedisBloom、RedisTimeSeries などの Redis モジュールが含まれます。これらには新しいデータ型が追加され、検索、データ分析、IoT などのアプリケーションがサポートされます。また、Enterprise Flash 層では、Redis を高速 フラッシュ ストレージで実行できるようになり、ギガバイトあたりのコストを削減しながら、10 倍のキャッシュ サイズを実現します。どちらの新しい製品層でも、SLA (サービス レベル アグリーメント) は99.9%から99.99%に向上しています。マイクロソフトと Redis Labs は今後も引き続き協力して、より多くの機能を追加する予定です。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ。Azure、Azure Cache、Redis、開発者、データ分析、システム アーキテクチャ

1.2.2 Azure Cosmos DB が、小規模なワークロードでのデータベース運用のためのサーバーレス オプションを提供

Azure Cosmos DB が、小規模なワークロードでのデータベース運用のためのサーバーレス オプションを提供します。 この新しい消費ベースのモデルにより、アプリ開発者は、小規模なアプリを構築してスケーリングし、暫定的なスループットのコミットメントとコストを要することなくテストを実行できます。トラフィック バーストが偶発的に発生する、パフォーマンス要件がそれほど高くない小規模なワークロードに最適です。 サーバーレス オプションは現在プレビュー中です。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、Azure Cosmos DB、データベース運用、アプリ開発、サーバーレス

1.2.3 Azure Database for MySQL と Azure Database for PostgreSQL が、選択肢、パフォーマンスおよびスケールを向上させる柔軟なサーバー展開オプションを提供

Flexible Server は、Azure Database for PostgreSQL と Azure Database for MySQL 向けのプレビューが公開されている新しい展開オプションで、ネイティブ Linux 統合による新しいアーキテクチャ上に構築することで、お客様に選択肢、パフォーマンス、スケールの向上を提供します。

この新しいオプションにより、データベースのメンテナンス、構成、チューニングを最大限に制御し、柔軟性を提供できるため、さまざまなワークロードのニーズに対応できます。ユーザーは、SLA (サービス レベル アグリーメント) に基づき、単一の可用性ゾーンと複数の可用性ゾーンの両方にわたって高可用性を選択できます。開発者は、エンドツーエンドの展開を簡素化するガイド付きの開発者エクスペリエンスにより、より生産性を高めることができます。総所有コストは、停止/開始機能で最適化されています。

PostgreSQL および MySQL 向けの Flexible Server に関する詳細を確認する。

タグ: Azure、Azure Database、データベース メンテナンス、可用性ゾーン、開発者、Flexible Server

1.2.4 Azure SQL が、ゾーンの冗長性を汎用データベースに拡張することで耐久性を強化

9 月下旬に提供が予定されている Azure SQL の新しいプレビュー拡張機能により、汎用データベースへのゾーン冗長性が拡大され、費用対効果の高いバックアップ ストレージ オプションが提供されるため、お客様はデータの破損や削除からデータを保護し、データセンターの大規模停電などの大規模な障害に対する復元力を強化できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、Azure SQL、ゾーン冗長性、データベース、バックアップ ストレージ、データセンターの大規模停電

1.2.5 IoT ゲートウェイやデバイスに最適化された Azure SQL Edge が一般提供を開始

最もセキュアな Microsoft SQL データ エンジンを、モノのインターネット (IoT) やエッジ デバイスに提供する Azure SQL Edge が利用可能になりました。IoT のワークロードに最適化された

SQL Edge は、組み込みのデータ ストリーミング、ストレージ、および人工知能をサポートしており、接続環境でも非接続環境でも動作する占有領域の少ないコンテナーに格納しました。

Microsoft SQL Server や Azure SQL と同じコードベースで構築された Azure SQL Edge は、業界をリードするセキュリティ、使い慣れた開発者エクスペリエンス、多くのチームがすでに知り、信頼している同じツールを提供します。

Azure SQL Edge は、接続環境、非接続環境、または半接続環境の ARM ベースおよび x 64ベースのデバイスで動作する、占有領域の少ない 500 メガバイト未満のコンテナーです。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.2.6 Azure Synapse と Power BI による使用量ベースの最適化

Power BI の利用パターンを分析し、その情報を Synapse と共有することで、クエリのパフォーマンスを向上させる新機能が利用可能になりました。Synapse は、Power BI ユーザー向けに最適化された具体化ビューを自動作成し、クエリのパフォーマンスを大幅に高速化します。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.2.7 ビッグ データおよび AI ワークロードを高速化する、Photon を使用した Delta Engine for Azure Databricks のプレビューを発表

Apache Spark 3.0 上に構築された Photon 搭載の Delta Engine は、Azure Databricks で実行される Spark ワークロードをさらに高速化します。Delta Engine は以下の 3 つのコンポーネントを通じてパフォーマンスを加速します。改善されたクエリ オプティマイザ、実行レイヤーとクラウド オブジェクト ストレージの間にあるキャッシュ レイヤー、そして C++で記述されたネイティブのベクトル化実行エンジンです。これらの改善により、Azure Databricks はオープン ソースの Apache Spark よりも 20 倍高速になりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.2.8 最終アクセス時刻のライフサイクル管理

お客様から頻繁に要求される機能であるアクセスベースのタイム ライフサイクル管理が、Azure Blob Storage で利用可能になりました。この機能では、オブジェクトをどの階層に配置するか、またはどの階層から削除するかをアクセス日付ポリシーで制御できます。これにより、コストを削減し、オブジェクトに関する完全なライフサイクルを作成することができます。

現在パブリック プレビュー中の Azure Blob Storage の最終アクセスでは、データへのアクセス頻度など、データの可視性が向上しました。これにより、お客様はアクセス時間に基づいてデータのライフサイクルを管理できるようになります。

さらに、お客様は最終アクセス時刻を使用できます。新しいシステム メタデータは、独立系ソフトウェア ベンダーのパートナーも利用でき、データの配置と保持の決定を行うことができます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.3 Azure データセンター

1.3.1 より多くの Azure リージョンに展開された可用性ゾーン

Azure Availability Zones (AZ) は、包括的なビジネス継続性および災害復旧戦略 (BCDR) 、仮想マシン上での 99.99% のアップタイムのサービス レベル アグリーメント (SLA)、柔軟で高性能なアーキテクチャ、組み込みのセキュリティを備えたマルチゾーンのサポートのための高可用性オプションを提供します。

マイクロソフトは、今後 24 か月間に、データセンターを運用する各国で可用性ゾーンのオプションを提供するロードマップを使用して、世界中のデータセンター リージョンで可用性ゾーンの展開を継続的に拡大していきます。9 月には、可用性ゾーンがさらに 2 つの既存のリージョン (カナダ中央とオーストラリア東部) で利用できるようになり、マイクロソフトの AZ 対応リージョンの総数は 14 になります。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、可用性ゾーン、高可用性

1.3.2 Azure Orbital が、衛星データおよび機能へのアクセスを提供することでコスト削減と効率性の向上を実現

Azure Orbital は、Microsoft Azure でデータを処理および分析するための物理的な衛星通信機能へのアクセスを提供する新しいマネージド サービスです。大規模な衛星データセットを扱う場合は、低遅延のグローバル ファイバー ネットワークを活用できます。Azure Orbital は、現在、一部のお客様にプライベート プレビューで提供されています。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、Azure Orbital、衛星、衛星データ、衛星技術

1.3.3 Azure Resource Mover が、リージョン間の複数のリソースの移動を簡素化

Azure Resource Mover は、お客様が複数の Azure リソースをリージョン間で移動し、最も関連性の高いデータセンター リージョンを活用し、進化するデータ レジデンシーのニーズに対応できるように支援する新しいサービスです。移行を管理する単一の管理画面を提供することで、複雑さを軽減しながら計画、準備、実行を加速することでプロセスを合理化します。Azure Resource Mover は現在、パブリック プレビューで利用可能です。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、Azure Resource Mover

1.3.4 Azure 仮想マシンのゾーン間の障害復旧が利用可能

ゾーン間の災害復旧では、ビジネスに不可欠な仮想マシンの複製、フェイルオーバー、およびフェイルバックを、ゾーンと同じリージョン内で実行できます。この機能は、アプリケーションをオンプレミスでホスティングしているお客様が、アプリケーションを Azure に移行した後にそれを模倣しようとしているような場合に、メトロベースの災害復旧戦略などのシナリオのオプションを追加します。複雑なネットワーク インフラがあり、セカンダリ リージョンで再構築するコストと複雑さを避けたい場合や、ペア リージョンの災害復旧オプションを使用したくないリージョンのお客様も対象です。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、災害復旧、仮想マシン

1.4 Azure Dev とエコシステム

1.4.1 .NET 5 リリース候補版が利用可能

.NET 5 の新たな拡張機能には、よりメモリ使用量を抑えた、小さくてより高速な単一ファイルアプリケーションが含まれており、オペレーティング システム全体のマイクロサービスやコンテナー化されたアプリケーションに適しています。

この変更は、ワークロード全体で .NET プラットフォームを統一する最新のステップを示すもので、パフォーマンスの大幅な向上、Windows ARM64 のサポート、および C# 9.0 と F# 5.0 言語の新しいリリースも含まれています。開発者は Go-Live ライセンスを使用してリリース候補版をダウンロードし、本番環境で使用することができます。

.NET 5 Release Candidate は機能が完成し、11 月 10 日に一般提供される予定です。

この更新の詳細と .NET 5 RC のダウンロードについては、こちらをご覧ください。

1.4.2 Azure App Service の更新には、新しいコスト削減オプション、Windows コンテナーのサポート、GitHub Actions の統合が含まれる

Web アプリを構築、デプロイ、スケーリングするための Azure App Service 管理プラットフォームの更新には、新しい価格帯、更新された Premium サービス、Windows コンテナーのサポート、新しいマルチネットワーク App Service 環境、GitHub Actions との統合が含まれます。

- **Reserved Instance (RI)** コミットメント割引が App Service で初めて利用できるようになりました。従量課金レートに比べて、1 年契約で 35%、3 年契約で 55% のコスト削減が可能です。また、開発/テストの価格割引を App Service Premium プランにも拡大しており、VNet 接続を必要とするワークロードの構築とテストをより手頃な価格で実施できるようになりました。

- **App Service Premium (V3) プラン**では、最新の Azure VM ハードウェアを活用して、パフォーマンスとスケーラビリティの向上を実現しています。このプランには、より強力な 2 コア、4 コア、および 8 コアのオプションが含まれており、最大 32 GB まで拡張可能なメモリにより、大規模なエンタープライズ Web アプリケーションやコンテンツ管理システムをより効果的にサポートします。同等の PV

2 構成と比較して 20% の割引で提供されるこのプランは、これまでで最も高性能でコスト競争力の高い特典です。RI 特典と組み合わせることで、最大 69% のコストを削減できます。

- **Windows コンテナーの一般提供**は、App Service Premium (V3) プランに含まれています。10 月 1 日より、より多くの地域で利用可能になり、地域ネットワークの統合、Private Link、およびマネージド サーバー ID を完全にサポートして更新されます。お客様は、複雑なレガシー構成や OS 依存性のあるさまざまな .NET フレームワーク アプリケーションをリフト アンド シフトし、App Service の完全に管理された機能を利用できるようになりました。

- **Isolated v2 プラン** (10 月にパブリック プレビューで提供) は、簡素化された展開エクスペリエンスが特徴で、最も機密性の高い Web ワークロードを実行するための独立したアプリ ホスティング環境を実現します。これは、ネットワークでパブリック インターネットに依存しないシングル テナント システムです。この環境では、Azure がそのワークロード専用のインフラストラクチャを保護している間に、お客様はワークロードのセキュリティをカスタマイズすることができます。Isolated v2 では、インスタンスごとのスタンプ費用を廃止することで、Isolated v1 プランと比較して、導入コストが最大 80% 削減されました。

- **GitHub Actions** と App Service との統合により、開発者は GitHub のコード リポジトリに新しいプル リクエスト、コミット、またはその他のイベントが発生した場合に、自動化されたワークフローを簡単に実行できるようになりました。この統合により、ユーザーは App Service デプロイ センターにアクセスし、画面の手順に従って、ネイティブの継続的な統合および継続的なデプロイのワークフローを設定することができます。

- **Azure App Service Migration Assistant ツールでの Java Tomcat サポート** (パブリック プレビュー中) により、Tomcat Web サーバーで実行されている Java アプリを検出および評価し、Windows または Linux 上の Azure App Service に移行できるようになりました。The Migration Assistant ツールは、詳細な評価を実行し、移行プロセスをお客様に説明します。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.4.3 Azure Communication Services を使用して、Microsoft Teams と同じセキュアなプラットフォームでリッチなコミュニケーション体験を構築可能

完全に管理されたコミュニケーション プラットフォームである Azure Communication Services が、パブリック プレビューで利用できるようになりました。Azure Communication Services を使用することで、開発者や組織は、事実上ほぼすべてのデバイスで動作するアプリケーション間での通信機能や連携されたユーザー体験を安全に構築することができます。コンシューマー アプリケーションやエンタープライズ アプリケーション全体で新しい通信体験を構築することは複雑であり、多くの場合、多額の投資と専門的な専門知識が求められます。Azure Communication Services を使用すると、わずか数行のコードで、音声やビデオ通話、チャット、SMS テキスト メッセージ機能をモバイル アプリ、デスクトップ アプリケーション、および Web サイトに簡単に追加できます。

Azure Communication Services には、通信技術、クラウドでの拡張性、エンタープライズ グレードのセキュリティ、開発効率が統合されています。これにより、開発者は、接続性が非常に重視される時代に求められる、豊かな顧客エンゲージメント体験を創出することができます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.4.4 Azure と Datadog の統合

Datadog と Microsoft Azure は協力して、10 月にリリースされる予定の統合 Datadog SaaS ソリューションを作成しました。Azure 上に構築され、Azure Marketplace から利用可能なこのソリューションは、Datadog のクラウド監視ソリューションにシームレスな体験を提供します。Azure と Datadog の統合により、企業はレガシー システムとクラウドベースのシステムを完全にマッピングし、クラウドへの移行の各段階でリアルタイムのデータを監視し、移行したアプリケーションがパフォーマンス目標を満たしていることを確認できるようになりました。Azure は、このような統合された体験を提供する最初のクラウドです。Datadog の監視およびセキュリティ サービスは、Azure とともに、新しい Datadog 組織をシームレスにプロビジョニングし、適切な Azure リソースを構成して、ログ/メトリクスを Datadog に送信するための統合された体験を提供します。つまり、これは完全に管理されたセットアップであり、お客様がセットアップしたり運用したりするためのインフラストラクチャを必要としません。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ: Azure、Azure Datadog、Azure Marketplace

1.4.5 Azure Kubernetes Service (AKS) の更新に、クラスターを簡単に一時停止してコストを節約し、大規模なポリシーを適用する機能が追加

Azure Kubernetes Service の更新に、クラスターを簡単に停止したり開始する機能と、AKS クラスターとリソースのガバナンスに Azure ポリシーを使用する機能が追加されます。

- **現在パブリックプレビューで公開されている AKS の停止/開始**クラスター機能により、AKS のお客様は、AKS クラスターを完全に一時停止し、後からボタンのスイッチを押すだけで中断した場所から再開することができ、時間とコストを節約することができます。これまでは、クラスターを停止または開始するために複数の手順を実行する必要があったため、運用に時間がかかり、コンピューティング リソースが浪費されていました。停止/起動機能により、クラスターの構成を維持したまま、クラスターを再構成する必要なく中断した場所から再開できるようになりました。

- **AKS 用の Azure ポリシー アドオン**一般提供されるようになったことで、Kubernetes リソースのポリシーを監査して適用することができます。これにより、お客様は Azure Resource Manager レベルを超えたポリシーを設定し、ポッド、ネームスペース、イングレス、およびその他の Kubernetes リソース全体で、詳細なコンプライアンスを推進できるようになります。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ:Azure Kubernetes Service、AKS、Azure ポリシー

1.4.6 Azure Spring Cloud が Steeltoe 開発フレームワークをサポート

9 月 2 日に、Azure Spring Cloud が一般提供されました。このサービスは、開発者が事前に構築されたライブラリや拡張機能を使用して、本番環境レベルのマイクロサービスを迅速に提供できる .NET マイクロサービス開発フレームワークである Steeltoe をサポートします。

このサポートはパブリック プレビュー中であり、開発者は VMware と共同で構築・運用される Azure上の完全に管理されたサービスである Azure Spring Cloud を使用して Steeltoe アプリケーションを構築、デプロイ、および構成できます。

開発者は、Azure Spring Cloud の依存関係を Steeltoe プロジェクトに追加することができます。また、Azure ポータルやコマンドライン インターフェイスを介して Steeltoe アプリケーションをデプロイし、メトリクスやログ、分散トレースを確認することもできます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ:Azure Spring Cloud、Steeltoe、.NET、マイクロサービス

1.4.7 GitHub Codespaces と Visual Studio の新たなサポートにより、どこからでも生産的な作業が可能に

GitHub Codespacesへの Visual Studio 2019 のサポートは現在ベータ版です。Visual Studio を使用している開発者は、統合開発環境 (IDE) 内からコードスペースを作成して管理できるようになりました。これは、Visual Studio Code とブラウザベースのエディターの既存のサポートを拡張したものです。開発者は、リモートで作業しながら生産性を向上させることができ、新しいプロジェクトに迅速に参加することができます。また、クラウドにホストされた開発環境の機能を活用することで、開発マシンの処理能力を向上させることができるようになりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.4.8 Logic Apps が新しいホスティング オプションを更新し、パフォーマンスと開発者ワークフローが改善

開発者や IT 専門家がタスク、ビジネス プロセス、ワークフローをスケジュール設定、自動化、およびオーケストレーションすることを支援する Azure Logic Apps クラウド サービスは、複数のワークフローを単一の Logic App で有効化することで、自動デプロイメントや CI/CD パイプラインの簡素化、新しいランタイム ホスティングの柔軟性の実現、パフォーマンスの向上などの新機能が追加されました。

また、この更新により、開発者はローカル開発と GitHub Actions 有効にする新しい Visual Studio 拡張機能を介して、最新のアプリにワークフローを構築することが可能になり、開発者ツールチェーンとの統合性が向上しました。

これらの機能はパブリック プレビュー中です。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ:Azure Logic Apps、Azure Functions、Azure App Service

1.4.9 Private Azure Marketplace をパブリック プレビューで提供

企業は、Azure Private Marketplace という新しいサービスを利用して、従業員向けに事前承認されたソリューションのプライベート マーケットプレイスをまもなく構築できるようになります。このサービスは、企業のサービスを自社のポリシーや規制に確実に準拠させるために役立ちます。これにより、従業員は会社の規則に従ったソリューションのみをデプロイすることができます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.5 Azure Hybrid、Azure Infra、Azure Migrate

1.5.1 Azure Arc 対応サーバーと Azure Arc 対応データ サービスを備えた任意のインフラストラクチャで Azure サービスを実行

お客様がハイブリッド ソリューションを採用するケースが増加する中、あらゆるインフラストラクチャでイノベーションを実現し、クラウドのイノベーションを解き放つために、マイクロソフトは Azure Arc を構築しました。1 年足らず前の最初のプレビュー以来、変化するニーズに対応する複数の新しいサービスを提供し、お客様の現状に対応することに重点を置いてきました。ハイブリッドへの投資を継続し、現在はさらに多くの機能を提供しています。

Azure Arc は、オンプレミスのデータセンター、マルチクラウド、エッジで実行される Windows および Linux サーバー、SQL サーバー、Kubernetes クラスターなどのインフラストラクチャ リソースに Azure 管理を拡張します。また、Azure Arc を使用すると、Azure SQL Managed Instance や Azure PostgreSQL Hyperscale などの Azure データサービスを任意のインフラストラクチャ上にデプロイすることもできます。

*Azure Arc対応サーバーは、一般的に本番ワークロード用の Windows サーバーと Linux サーバー*で利用できます。これには、インベントリ、組織化、ガバナンスが含まれており、お客様がサーバーにタグ付けしたり、階層化したり、単一の場所から検索したり、Azure ポリシーを通じてサーバー構成にガードレールを設定したりすることができます。また、Azure Security Center、Azure Monitor、または Update Management などの Azure 管理機能を活用して、単一の

コントロール プレーンから管理方法をさらに最新化することもできます。*Azure Arc 対応の Kubernetes と Azure Arc 対応の SQL Server は、現在パブリック プレビュー中です。*

Azure Arc対応のデータサービスがパブリック プレビューになり、Azure SQL Managed Instance と Azure PostgreSQL Hyperscale へのオープン アクセスが可能になりました。これは、オンプレミスのデータセンター、エッジ、その他のパブリック クラウドなど、あらゆるインフラストラクチャで実行できます。データ ソースはさまざまなインフラストラクチャに分散している場合が多く、データの主権、遅延、コンプライアンスに関する問題を引き起こします。Azure Arc に対応したデータサービスを使用することで、選択した任意のインフラストラクチャ上で接続モードと非接続モードの両方で実行しながら、エバーグリーン SQL による「常に最新の状態」、弾力性に優れた拡張性、統一された管理エクスペリエンスなどの Azure クラウドのイノベーションを利用できるようになりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.5.2 大規模なバックアップ管理を実現する統一されたエクスペリエンスと、新しいリソースとアプリケーションに拡張された Azure Backup 機能を提供する最新のバックアップ センター

この新機能により、お客様は Azure 上でバックアップを一元的に管理し、バックアップと復元のオプションを新しいタイプのリソースや複数のリージョンに拡張することができるようになります。

パブリック プレビュー中の**Backup Centerでは、**大規模なバックアップ管理のために設計された単一の統一されたエクスペリエンスを提供します。Backup Center を使用すると、格納庫、サブスクリプション、ロケーション、さらにはテナントにまたがる大規模なバックアップ インベントリを動的に探索することができます。さらに、Backup Center には、以下のようなバックアップ関連のアクションをトリガーする機能が組み込まれています。

- Azure ポリシーとの緊密な統合によるガバナンスの定義と追跡。
- Backup Center は以下のワークロード タイプをサポートしています。Azure Virtual Machines、Azure Virtual Machines の SQL、Azure Database for PostgreSQL サーバー、Azure Files。

Azure Backup は、Azure VM の**リージョンをまたがる復元**を**拡張**して、SQL および SAP HANA バックアップをサポートするようになりました。リージョンをまたがる復元を使用すると、

監査やコンプライアンスのために任意の時点でセカンダリ リージョンにバックアップ データを復元でき、プライマリ リージョンを使用できなくなった場合にも復元することができます。

Azure Resource Mover は、Azure Resource Moverは、マネージド ディスク、ネットワーク コンポーネント、SQL Azure リソースなどのリソースをリージョン間で簡単に移動できるようにする新製品です。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.5.3 Azure Compute と Azure Disk Storage の新機能と拡張機能

複数の新しい Azure インフラストラクチャ機能がプレビュー、または一般提供されました。

- 汎用でメモリ負荷の高いワークロード向けの Intel Cascade Lake プロセッサーを搭載した新しい Azure Virtual Machines (VM) が一般提供されました。これらの VM は、前世代と比較して最大 20% 高い CPU パフォーマンスを提供します。
- Azure Dedicated Host により、お客様がよりきめ細かく制御できるようになりました。Dedicated Host と分離された VM でホストのメンテナンス操作をスケジュールしたり、ゲスト OS イメージの更新をロールアウトするタイミングを制御したりできます。また、Azure Dedicated Host は、仮想マシンのスケール セットもサポートしており、VM がデプロイされるホスト グループをプラットフォームで選択できる機能を提供することで、デプロイを簡素化します。
- 新しい Azure Disk Storage の更新が一般提供されました。これには、プライベート仮想ネットワーク上でデータの安全なインポートとエクスポートを可能にする Azure Private Link 統合が含まれ、セキュリティを強化し、レガシー データベースの Azure への移行を可能にする Azure Ultra Disks 上の 512E をサポートします。

Azure Private Link 統合と Azure Ultra Disks の詳細をご確認ください。

1.5.4 Azure Kubernetes Service (AKS) on Azure Stack HCI をパブリック プレビューで提供

現在プレビュー中の Azure Kubernetes Service (AKS) on Azure Stack HCI は、開発者や管理者が Azure Stack HCI 上でコンテナー化されたアプリをデプロイして管理できるようにします。Azure 上の AKS の一貫したエクスペリエンスを活用し、ハイブリッド機能で Azure に拡張し、

組み込みのセキュリティで自信を持ってアプリを実行し、使い慣れたツールを使用して Windows アプリを最新化できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.5.5 Azure Migrate が新しいエージェントレス ソフトウェア インベントリと依存関係マッピングを発表し、移行を簡素化

データセンターからクラウドへの移行は、現在一般提供されている新しい Azure Migrate 機能により、これまでになく簡単になりました。お客様は、エージェントレスのソフトウェア インベントリや依存関係のマッピングなど、資産の包括的な検出と評価を実行できます。その後、可用性ゾーンと UEFI 移行の追加サポートを含め、ワークロードを大規模に移行できます。

Azure 移行プログラムは最近、Windows 仮想デスクトップのサポートを拡張し、企業がほぼどこからでも安全なリモートデスクトップ体験を実現できるようにし、クラウドへの移行を簡素化するように支援しています。Azure Migration Program はまた、ASP.NET Web アプリケーションのサポートを発表し、オンプレミスの .NET Web アプリをマイクロソフトの完全に管理された App Service および Azure SQL サービスに移行することで、コストを削減し、アプリ管理を簡素化できるようにしました。

さらに、FastTrack for Azure は最近、Windows 仮想デスクトップをサポートするように拡張され、デプロイメントを加速しています。FastTrack for Azure は、クラウド ソリューションを迅速かつ効果的に設計し、デプロイすることを支援するプログラムです。これには、実績のあるプラクティスやアーキテクチャ ガイドを使用する、Azure エンジニアによる個別のガイダンスが含まれます。

Azure Migrate、Azure Migration Program、および FastTrack for Azure の詳細をご確認ください。

1.5.6 新しい Azure Spot 仮想マシン機能と Azure Advisor スコアでワークロードのコストを継続的に最適化

Azure ポータルでプレビュー中の Azure Spot VM の新機能により、お客様が Spot VM の価格履歴と過去 28 日間のエビクション率にアクセスして確認できるようになりました。Azure Spot VM の新機能により、ワークロードがエビクションされる確率を推定できるだけでなく、Spot

VM を使用した割り込み可能なワークロードを実行するためのコストをより適切に推定できるようになりました。

さらに、Azure Advisor スコアがプレビュー中です。Azure Advisor スコアは、Azure のベストプラクティスに基づいて、お客様が Azure のすべてのリソース全体でコスト、セキュリティ、信頼性、パフォーマンス、オペレーショナル エクセレンスを最適化できるように設計された Azure ポータルの新しい測定ツールです。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.5.7 新しい Azure Stack のフォーム ファクターとサービスが、強力なコンピューティングをエッジで拡張し、高度な分析を実現

リモート エリアで動作し、エッジで強力な分析を実行して迅速な結果を得るために設計された 2 つの新しい Azure Stack Edge アプライアンスが一般提供されました。

- Azure Stack Edge Mini R は、最も過酷な条件下で動作するように設計された軽量のポータブル デバイスで、バックパックに入れて簡単に持ち運ぶことができます。
- Azure Stack Edge Pro R は、リモート エリア向けに設計されており、エッジでのインテリジェンスを提供し、NVIDIAのT4 GPU を搭載しています。

さらに、Azure Stack Hub と Azure Stack Edge Pro には GPU が搭載され、お客様がオンプレミスおよびエッジで AI、機械学習、推論機能を実行できるようになり、次のような新しいシナリオが可能になりました。

- Azure で機械学習モデルを構築してトレーニングし、内蔵の NVIDIA GPU を利用してこれらのモデルを実行し、エッジで AI と推論をローカルに実行する。
- NVIDIA V100 Tensor Core、NVIDIA T4 Tensor Core、AMD Mi25 GPU を使用した新しい仮想マシンのサイズの実行。

Azure Stack Hub と Azure Stack Edge の詳細をご確認ください。

1.5.8 次世代 Azure VMware ソリューションの一般提供を開始

本日、次世代の Azure VMware ソリューション (AVS) が米国東部、米国西部、西ヨーロッパ、オーストラリアで一般提供され、他の地域でも近日中に提供される予定です。詳細については、地域別の Azure 製品のページをご覧ください。今回のリリースでは、信頼性が高く可用性

に優れた Azure インフラストラクチャ上で動作する、最新の VMware Cloud Foundation コンポーネント (vSphere、NSX-T、HCX、vSAN など) が提供されます。Azure VMware ソリューションは、お客様のオンプレミス展開からクラウドへのシームレスな移行を実現し、複雑さを軽減し、運用の一貫性を維持できるように支援します。

この発表により、パートナー ソリューションのエコシステムも大きな成長を遂げます。独自の Microsoft ソリューションに加えて、AVS は Commvault、Veeam、Veritas のバックアップ ソリューションもサポートします。また、Zerto および JetStream と緊密に連携して、DR 機能を AVS にも導入しています。さらに、オンプレミスの GitHub リポジトリをクラウドに移行することを検討しているお客様のために、GitHub エンタープライズ ソリューションもサポートしています。

Azure VMware Solution は、お客様にさらなる柔軟性を提供するための継続的な取り組みとして、ネイティブの Azure Migrate ツールと統合して、クラウド移行のための AVS 固有の評価を構築できるようにしました。さらに、クラウドに移行する際の Replication Assisted vMotion (RAV) の重要性をお客様からお聞きし、Azure VMware ソリューション環境にワークロードを移行する際の大規模な一括移行用の RAV を含む VMware の HCX エンタープライズ エディションを提供することになりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.5.9 新機能により、Linux を Azure に簡単に移行

Azure の新しい更新により、Linux ワークロードの Azure への移行がよりシームレスになりました。これには以下の内容が含まれます。

- プレビュー版で提供される Azure ハイブリッド特典は、Linux を Azure に移行する Red Hat と SUSE のお客様の柔軟性を向上させ、ユーザーエ クスペリエンスを向上させます。
- Red Hat Enterprise Linux (RHEL) およびSUSE Linux Enterprise Server (SLES) のお客様は、ポータルから直接または CLI を通じて、既存の Linux VM を、従量課金 (PAYG) から 既存の Red Hat サブスクリプションおよび SUSE サブスクリプションを利用したサブスクリプション課金 (BYOS) に変換することができます。
- これは、オンデマンドの PAYG Linux VM の利便性を生かして Azure に POC を最初にデプロイし、テストが完了したら RHEL と SLES のサブスクリプションを使用して長期

運用に変換できる独自の機能です。これにより、本番環境の再デプロイに伴う問題が解消され、オンプレミスの RHEL および SLES サブスクリプションへの既存の投資が維持され、移行計画に関する懸念が軽減されます。

- Azure Image Builder は、年内に一般提供される無料のイメージ構築サービスで、Linux および Windows のイメージの作成、更新、修正プログラム、管理、および運用を効率化します。Azure Image Builder では、使用時にリソースをサブスクリプションにデプロイし、イメージ構築パイプラインの実行時に消費される仮想マシンと関連するストレージおよびネットワーク リソースに対してのみ料金を支払います。
- Azure でサポートされる新しい Linuxディストリビューションである、Kinvolk による Flatcar Container Linux が、Azure Marketplace で利用可能になりました。Flatcar はイミュータブルな Linux ディストリビューションであり、Core OS (2020 年 5 月 26 日にサービスを終了) と互換性があるため、Flatcar Container Linux は Azure 上で動作するコンテナー ワークロードの移行において、実行可能でシンプルな選択肢となります。

Linux ユーザー向けの Azure ハイブリッド特典のプレビュー、Azure Image Builder および Flatcar Container Linuxの詳細をご確認ください。

1.5.10 Windows Server ワークロードに最高のエクスペリエンスを提供する、Azure でのみ実現可能な新しいイノベーション

Azure Automanage は、Azure 上の Windows Server 仮想マシン (VM) のライフサイクル全体で自動化された運用により、お客様の日常の管理タスクを大幅に削減できるようにするプレビュー中の新しい Azure サービスです。 Azure Automanage は、Azure Backup や Azure Security Center などのサービスを登録して構成することで、Azure Cloud Adoption Framework で定義されているビジネス継続性や、セキュリティとコンプライアンスの運用面での VM 管理のベスト プラクティスを自動的に実装します。管理者は、ポイント アンド クリックの簡単な操作で、VM のライフサイクル全体を個別または大規模に管理できるようになりました。仮想マシンの構成が適用されたベスト プラクティスから逸脱した場合、Azure Automanage は検出して VM を自動的に修正し、目的の構成に戻します。

IT 管理者が使い慣れたサーバー管理ツールである **Windows Admin Center** が、Azure Portal でプレビューとして利用できるようになりました。この新機能により、Azure Portalから 直接、Azure 上の VMで Windows Server OS の詳細な管理を実行することが可能になりました。お客様は、Windows Admin Center の使い慣れたエクスペリエンスを生かして、Azure Portal で構成、トラブルシューティング、およびメンテナンス タスクを実行できます。この機能は、クラウドおよび Azure でネイティブに使用でき、常に最新の機能に更新されます。

Azure Automanage および Windows Admin Center の詳細をご確認ください。

1.6 Azure IoT

1.6.1 新しい Azure Certified Device プログラムにより互換性が保証され、市場投入までの時間を短縮

新しい Azure Certified Device プログラムは、Azure Certified デバイス カタログを通じて、適切なデバイスを適切なソリューションに接続するエクスペリエンスを合理化し、デバイス開発者とソリューション開発者の両方にメリットを提供します。

デバイス ビルダーにとっては、この認証により、信頼性の検証、検証、伝達に自分の時間とリソースを使用する必要がなくなるため、市場投入までの時間が短縮されます。ソリューション ビルダーとディストリビューターにとっては、この認証は品質と互換性の両方を保証するものです。

カタログでは、3 種類の Azure 認証を通じてデバイスの互換性と差別化が強調されます。

- **Azure Certified Device** は、デバイスが Azure IoT Hub に接続し、Device Provisioning Service (DPS) を介して安全にプロビジョニングできることを検証するエントリーレベルの認証です
- 8 月に発表された **IoT Plug and Play** は、カスタム デバイス コードなしでデバイスを構築するプロセスを簡素化する認証です
- **エッジ マネージド認証**では、Windows、Linux、または RTOS を実行する IoT デバイス向けの Azure 接続デバイスのデバイス管理標準に焦点が当てられています。現在、このプログラム認証は、モジュールのデプロイと管理のための Edgeランタイムの互換性に重点が置かれています。

この更新については、 こちらの詳細をご覧ください。

1.6.2 AT&T が初の Azure Sphere セルラー保護デバイスを市場に投入

AT&T は、初のセルラー保護デバイスである Azure Sphere を発売し、Wi-Fi アクセスに依存することなく接続性とセキュリティを拡張できるようにしました。

この新製品により、企業はさまざまな既存のデバイスやマシンを、セルラー ネットワークを介して顧客のクラウドに直接接続することができます。これにより、数千台のデバイスの管理および監視、データの集約、潜在的な問題の特定が可能になります。

AT&T のセルラー ネットワークを利用することで、企業のお客様は、AT&T が日常の運用をサポートするマネージド サービスを提供している 500 のキャリアにまたがる 200 か国以上のデバイスに接続することができます。AT&T はエンドツーエンドのプロフェッショナル サービスを提供しており、セキュアなセルラー ネットワークは Azure Sphere のセキュアなアーキテクチャを拡張します。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

1.7 Azure MR

1.7.1 HoloLens 2 が新市場に出荷。パートナーは Azure Kinect DK 用の Microsoft 3D Time of Flight ディープ技術を搭載したデバイスを構築可能。Azure Mixed Reality サービスのポートフォリオに、Azure Object Anchors を追加

複合現実はあらゆる分野で成長を続け、重要な役割を果たしていますが、Ignite 2020 ではその勢いを受けて 3 つの発表が行われました。

HoloLens 2

HoloLens 2 は現在、イタリア、オランダ、スイス、スペイン、オーストリア、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、ベルギー、ポルトガル、ポーランド、シンガポール、香港、台湾で購入可能です。

HoloLens 2 は、2019 年 11 月に発売されて以来、既存市場で積極的に導入されており、Build 2020 では HoloLens 2 が秋に市場を拡張して発売されると発表されました。

Azure Kinect DK

2019 年 7 月に発売された Azure Kinect DK は、企業がマイクロソフトの 3D ディープ技術である Time of Flight を活用できるための明確なニーズを示したことで、興奮と熱意に包まれています。Azure Kinect は、お客様が概念実証をテストして構築するための開発者キットとしてリリースされました。本日、マイクロソフトの 3D Time of Flight ディープ技術を利用したデバイスを構築する 2 社(Analog Devices および SICK AG) とのコラボレーションを発表できることを嬉しく思います。

マイクロソフトの目標は、独立系ハードウェア ベンダー、独立系ソフトウェア ベンダー、システム インテグレーターで活発なエコシステムを構築し、マイクロソフトの最先端の 3D Time of Flight ディープ技術、マイクロソフトのインテリジェント エッジおよびインテリジェント クラウド プラットフォームの上にデバイス、ソフトウェア、Azure クラウド サービスおよびソリューションを構築して、詳細な理解が必要なお客様の問題を解決することです。

Analog Devices は、最も困難なエンジニアリングの課題解決に取り組む世界的な高性能アナログ技術のリーディング カンパニーであり、民生用電子機器、自動車用キャビン、産業用物流のユース ケースを対象とした商用の深度カメラ モジュールとともに、深度センサー シリコンの設計、製造、販売にマイクロソフトの Time of Flight 技術を組み込む予定です。Analog Devices は、マイクロソフトの技術を使用した初の 3D Time of Flight イメージング システムを、2020 年末までに提供することを目指しています。

産業用アプリケーション向けのインテリジェント センサーとセンサー ソリューションの世界有数のメーカーである SICK AG は、マイクロソフトの Time of Flight 技術を搭載することで、SICK の 3D Time of Flight Visionary-T カメラ製品ラインに最先端の技術を導入し、さらに洗練されたものにします。SICK AG は、すでに一部のお客様にマイクロソフトの Time of Flight ディープ技術を搭載した最初のカメラを提供しており、2021 年の前半には Visionary-T Mini が正式に発売されます。

Azure Object Anchors

マイクロソフトは、Azure Mixed Reality サービスのポートフォリオを拡大し、プライベート プレビューで利用できる Azure Object Anchors を追加しました。

Azure Object Anchors により、開発者は現実の世界でオブジェクトを自動的に検出、配置、および追跡できるようになります。Object Anchors は、手動の設定や配置を必要とすることなく、単一のオブジェクトまたはそのインスタンスを追跡できます。このサービスが提供される以前は、開発者は手動でアンカーを配置するか、ウェイ ポイントを検出するために QR コードを使用する必要がありました。

製造業、小売業、医療、ゲーム業界向けの複合現実アプリを開発する開発者は、Azure Object Anchors を使用してトレーニング開発を簡素化し、従業員に学習タスクを段階的にガイドし、物理空間でオブジェクトの既存の 3D モデルを使い、Object Anchors でカウントから追跡、ピッキング、梱包まで、特定の環境でそのオブジェクトのインスタンスを特定して追跡することができます。

HoloLens 2、Azure Kinect DK、および Azure Object Anchors の詳細をご確認ください。

1.8 Azure Networking

1.8.1 Azure のネットワーク拡張機能に、Azure Virtual を備えた Cisco SD-WAN および Global Load Balancer 機能を追加

Ignite で 発表された Azure のネットワーク機能拡張には、Azure Virtual WAN ハブ内での Cisco Software-Defined Wide Area Network (SD-WAN) のネイティブ サポートの追加や、Azure Load Balancer の Global Load Balancer 機能などがあります。どちらもプレビューで提供されています。

Cisco SD-WAN を Azure Virtual WAN で使用することで、ネットワークのトレンドに合わせて SD-WAN などの技術を活用し、インテリジェントなパス選択と中央ポリシーによってパフォーマンスを向上させることができます。これらは、ローカル ブレイクアウトを経由してブランチからクラウドに直接トラフィックを送信することで、従来のネットワークバックホールを排除するよう機能し、選択したベンダーのパス選択とポリシー管理を活用できるようにします。

Global Load Balancer を使用すれば、Azure Load Balancer の機能によってグローバル アプリケーションにトラフィックを分散し、パフォーマンスと可用性を向上させることができます。

Cisco SD-WAN with Azure Virtual WAN および Global Load Balancer の詳細をご確認ください。

1.9 Windows 仮想デスクトップ

1.9.1 リモート ワークの導入を促進する、新しい Windows 仮想デスクトップ機能

Windows 仮想デスクトップを使用すれば、最高の仮想 Windows 10 体験により、安全なリモート ワークを迅速かつコスト効率よく実現できます。最近の更新では、デプロイ体験をさらに簡素化し、Microsoft Teams のオーディオ/ビデオ (A/V リダイレクト) のサポートを追加しました。

これらの最近の更新に加えて、今年末までに利用可能になる以下の新機能を発表します。

- Windows 10 のマルチセッションをサポートする Microsoft Endpoint Manager により、IT 管理者は物理デバイスと同じ方法で仮想デスクトップを管理し、セキュリティを確保できるようになります。

- Azure Monitor との新たな統合により、関連するすべてのモニタリング インサイトを取得し、問題をすばやく特定してトラブルシュートするための豊富な視覚化を行うワークブックを提供します。これは、大規模な仮想デスクトップをデプロイしながら、簡単に監視およびトラブルシューティングを行いたいと検討するお客様にとって重要な考慮事項です。
- Azure ポータルからアプリケーション レイヤーを追加する機能により、お客様がアプリケーションを迅速にオンボードできるようになります。わずか数クリックで、従業員向けのアプリケーションをデプロイして公開できるようになりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

2.ビジネス アプリケーション

2.1 パワー プラットフォーム

2.1.1.Microsoft Power Automate Desktop は、ユーザーにロボット プロセスの自動化を提供します

Microsoft Power Automate Desktop は、公開プレビューで利用でき、Power Automate のロボット プロセス オートメーション (RPA) 機能を拡張します。

Microsoft は今年初めに Softomotive を買収し、Microsoft Power Automate のローコード ロボット プロセス自動化機能を拡張し、プロセスを自動化する機能を強化しました。

Power Automate Desktop は、市中の開発者およびビジネス ユーザーにデスクトップ自動化オプションを提供することにより、Power Automate 内の RPA 機能をさらに一般化するものです。

Power Automate Desktop を使用すると、最小限の労力でデスクトップ アプリケーションと Web アプリケーションの両方でイメージできる Windows ベースのタスクを自動化できます。Power Automate Desktop の直感的な設計環境により、非コーダーは単一行のコードを記述することなく、プロセスを迅速に自動化できます。これに加えて、使い慣れた環境で上級ユーザー、プログラマー、開発者に完全な制御と柔軟性を提供します。

複雑なプロセスとワークフローのためのレガシーなものを含む、システム間の単純なデータ転送をなどのタスクを自動化することもできます。画面上の画像を検索したり、PDF からデータを取得したり、さまざまな種類のドキュメントやフォルダーを操作したり、メールを送信したりできます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

2.1.2.データ インサイトへのアクセスを強化し、競争力の高い価格設定を実現するために、Teams の Power BI と新しい Power BI Premium Per User を更新しました

Microsoft Teams 用の Power BI アプリを活用して、チームワークにデータ インサイトを導入します。Power BI では、より多くのユーザーが選択できるようになり、Teams の Power BI で

は、チームワークにデータ インサイトを導入するためのいくつかの機能強化が行われます。これからの予定を見てみましょう。

今年後半に公開プレビューで公開される Teams の Power BI アプリの機能強化により、組織全体からデータを見つけやすくなり、チーム内で Excel データセットから視覚化をすばやく作成し、より効率的にコラボレーションして、リアルタイムのインサイトに基づいて意思決定を行うことができます。ユーザーがデータを見つけて分析するための一元化された場所を作成すると同時に、埋め込みチャネル、チャット、会議の経験を備えた Excel とチームの使用を強化しました。

個々のユーザーに提供される Power BI Premium。新しい Power BI 製品である Power BI Premium Per User は、11 月から公開プレビューで利用可能になり、2021 年の春に一般提供されます。これは、組織の容量ライセンスとして利用可能であった Power BI Premium を補完するものです。

Premium Per User は、高度な分析機能とエンタープライズ ビジネス インテリジェンス (BI) 機能を活用してより良い意思決定を行うための素晴らしい方法です。競争力のある価格で柔軟性のある展開により、組織のデータ カルチャーを推進する新しい方法となります。

Power BI Premium は、Premium 機能を必要とする小規模な Power BI 展開を行う組織、大規模な Power BI Pro を展開している組織で、一部のユーザーがページ分割されたレポート、データフロー、AI などへのアクセスを求めている場合、また、E5 を使用していて、完全な Premium 展開の準備がまだ整っていないが、Premium に「ステップアップ」したいと考えている組織に最適です。

Power BI Premium のパフォーマンスの向上とオートスケールなどの新機能を活用します。Power BI Premium の基盤となるアーキテクチャの改善により、組織は投資収益率を最大 16 倍に高速化し、使用状況の可視性と容量管理を向上させることができます。Power BI Premium は、より高速な同時処理、容量を自動的に追加する機能、および透過的な使用率メトリックをすべてのお客様に提供します。

導入パイプラインが一般提供されます。導入パイプラインは効率的で再利用可能なツールであり、Premium 機能を備えた企業が組織コンテンツのライフサイクルを管理できるようにします。これにより、エンド ユーザーが表示する前に、レポート、ダッシュボード、データセットなどの Power BI コンテンツを開発およびテストできます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

2.1.3.プロフェッショナルな開発者を対象に、パワー プラットフォームのローコード アップデートを GitHub と Azure に公開プレビューしています

パワー プラットフォーム用の Azure API 管理コネクターが公開プレビューで利用可能になりました。プロフェッショナルな開発者に境界のないローコード ツールを提供することが、開発者のスピードにとってより重要になってきています。Power Apps を使用すると、プロフェッショナルな開発者は、パワー プラットフォームと Microsoft Teams 用の Power Apps を介してシームレスにスケーリングしながら、Azure API Management と Azure Functions を使用して、Microsoft がホストするサードパーティ製アプリ、レガシー アプリ、または基幹業務アプリにパワー プラットフォームコネクタを構築できるようになります。市中の開発者は、スタンドアロンの Power Apps ライセンス要件がなくても、Teams を介して Power Apps アプリを大規模に配布できます。

パワー プラットフォーム用の GitHub 統合が公開プレビューで利用可能になりました。成功するためには、作業で使用するツールで開発者に会うことが重要です。開発者は、市場で入手可能なパワー プラットフォームの GitHub アクション（または事前構成されたテンプレート）を使用して、独自のソフトウェア開発ライフサイクル ワークフローを作成し、パワー プラットフォームソリューションと環境をシームレスに管理できます。パワー プラットフォームと GitHub の統合により、開発者はパワー プラットフォームの GitHub コネクターを使用してパワー プラットフォームソリューションと環境をシームレスに管理できるようになり、DevOps エンジニアと IT が市中の開発者向けのセルフサービスの継続的統合と継続的デリバリー（CI/CD）を管理できるようになります。Ignite での公開レビュー。

Power Virtual Agents と Azure Bot Framework。ボット メーカーは、Bot Framework Composer などの Azure開発ツールを使用してカスタム ダイアログをコード化し、それらを Power Virtual Agents ボットに直接追加できます。これらのダイアログは、残りの Power Virtual Agents ボット コンテンツと一緒に保存、ホスト、および実行できます。これにより、ボット機能をカスタムコードで拡張する簡単な方法が提供されるため、追加の Azure ホスティング、デプロイ、または複雑な課金は不要です。この機能は、2020 年秋に公開プレビューで利用できるようになります。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

2.2 Dynamics 365

2.2.1.新しい Dynamics 365 の音声チャネルにより、コンタクト センター業務を効率化します

Dynamics 365 と Azure Communication Services は、コンタクト センターの運用を合理化し、信頼できる完全に接続されたカスタマー エクスペリエンスを提供するファースト パーティの音声チャネルを導入しています。

複数のベンダーの契約や統合を管理する必要がないようにするために、お客様は単一ベンダーのカスタマー サービス ソフトウェア ソリューションをいっそう強く求めています。新しい音声チャネルにより、カスタム構築された複雑な統合によって引き起こされる問題が最小限に抑えられ、組織は変化するビジネス ニーズに合わせて簡単に拡張できるカスタマー エクスペリエンスとエージェント エクスペリエンスを提供できます。

このソリューションはこの 10 月からプライベート プレビューで利用可能になり、組織がライブ チャット、デジタル メッセージング、SMS などのチャネルを介してお客様に即座に接続して関与できるようにする堅牢なアプリケーションである Microsoft Dynamics 365 Customer Service のオムニチャネル機能と直接統合されます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

2.2.2.新しい Dynamics 365 Supply Chain Management ツールにより、製造および倉庫業務の常時稼働が実現し、リアル タイムの在庫表示が可能になりました

Dynamics 365 Supply Chain Management の新しいアドインにより、サプライ チェーンの可視性が向上し、変化する需要と供給にお客様が迅速に対応できるようになります。

企業は、リモート施設で運用を実行する際に、遅延と接続に苦労することがよくあります。並行して実行される大量のリソース集約型プロセスは、ネットワーク遅延を引き起こし、生産性を低下させる可能性があります。

Dynamics 365 Supply Chain Management の新しいクラウドおよびエッジ スケール ユニット アドインにより、重要な製造プロセスおよび倉庫保管プロセスを、クラウドから切断されている場合でも 24 時間体制で稼働させることができます。

さらに、Dynamics 365 Supply Chain Management の新しい在庫可視化アドインにより、お客様は在庫をリアルタイムで決定できるため、納期どおりの納品を確実にし、サプライ チェーンの混乱を克服することができます。

手持ちの在庫を決定する機能により、企業は注文を時間どおりに完了し、停止と在庫過剰を緩和し、ビジネスの継続性を妨げるサプライ チェーンのギャップを特定できます。多くの場合、このプロセスはリソースを大量に消費し、リアルタイムの手持ち在庫を数秒で評価できるソリューションはほとんどありません。

10 月の公開プレビューで利用可能になる新機能は、組織が分散モデルでサプライ チェーン関連のワークロードを実行し、在庫レベルをより詳細に把握できるようにすることで、組織が回復力を構築するのに役立ちます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

2.2.3.Dynamics 365 Project Operations は、サービス事業向けの完全なクラウド配信ソリューションを提供します

Dynamics 365 Project Operations は、見込み客から支払いまで、サービス ビジネスを運営するために作成された統合ソリューションで、一般提供されています。

今日のビジネス環境では、サービス組織は機敏であり、リモートで操作しながら操作方法をすばやく変更する必要があります。Project Operations により、組織は、実行可能なデータ、プロセス ガバナンス、および測定可能な結果を中心に、販売、プロジェクト管理、および会計のチームを結びつけることができます。サービス ビジネスは、見積もりから請求書、ビジネス インテリジェンスまで、プロジェクトを首尾よく提供するために必要なすべてを、クラウドで提供される 1 つのソリューションで入手できます。

Microsoft パワー プラットフォームに基づいて構築されたこのソリューションは、Power Apps で構築された他の Dynamics 365 アプリケーションまたはカスタム アプリケーションを追加し、チーム、SharePoint、Microsoft 365 などのアプリやサービスに簡単に接続できるようにすることで拡張できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

3.イノベーションと業界クラウド

3.1 イノベーション

3.1.1.新しい Microsoft Premonition Early Access Program は、パートナーが環境内の生物学的脅威を検出するために役立ちます

Microsoft Premonition は、潜在的な病原体が大規模なアウトブレイクを引き起こす前に検出することを目的としたシステムです。Microsoft Premonition の技術スタックは、蚊などの疾病キャリアを監視してインテリジェントにサンプリングするロボット プラットフォームと、既知および新規の生物学的脅威についてセンサー ネットワークによって収集された環境サンプルを遺伝学的に分析するクラウド規模のメタゲノミクスで構成されています。この包括的な技術スタックは、環境の継続的なモニタリングとコスト効率に優れた優先順位付けを可能にするように設計されています。

本日、Microsoft Premonition チームは、今後数週間以内に提供される Early Access Program (EAP) を通じて、さらに多くのパートナーに Premonition 技術へのアクセスを拡大することを発表しました。この発表は、5 年間にわたる先進的な研究開発の成果であり、パンデミック対策への新たなアプローチに向けた重要な一歩です。

Microsoft Premonition は、これらのシステムについて、より広範な分野横断的な利点と影響をさらに調査するために、全米科学財団の収束加速プログラム (Convergence Accelerator Program) を通じて一流の学術機関と提携します。学術パートナーには、ジョンズ ホプキンス大学、ヴァンダービルト大学、ピッツバーグ大学、ワシントン大学の保健指標評価研究所などが含まれます。さらに、マイクロソフトとバイエルは、病原媒介生物による疾患、および生物学的脅威の検出のための自律型センサー ネットワークの役割についての理解を深めるために、既存の協力関係を拡大する予定です。

また Ignite では、Microsoft Premonition チームがマイクロソフトのレドモンド本社にある「予知性能試験場 (Premonition Proving Ground)」施設の舞台裏を公開します。ここでは、研究者がロボットの設計を評価し、人工知能 (AI) モデルを訓練し、人工生態系の中で病気を媒介する蚊の種類に関するビッグ データを収集しています。

このデータは、Microsoft Premonition Cloud で分析されます。これは、Premonition システムによって収集されたマルチモーダル データ ストリーム (IoT 形式の表現型データとメタゲノムデータの両方) を集約して分析するための完全な Azure バックエンドです。Azure IoT、Azure Data Lake Gen2、およびインサイトを生み出す最新のサーバーレス アーキテクチャを紹介しています。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

3.1.2.Open Data Campaign レポートで、データ共有を活用して差し迫った世界の課題に取り組む方法を提示

マイクロソフトは 4 月、あらゆる規模の組織が AI とデータ エコノミーのメリットを享受できるようにするために、データの格差を解消するためのキャンペーン「Open Data Campaign」を開始しました。キャンペーンの一環として、マイクロソフトは、共有データを中心に構築された 20 の新しいコラボレーションを開発することを約束しました。これにより、人々や組織は 2022 年までにデータを活用して世界で最も差し迫った課題に対処できるようになります。

キャンペーン開始から 5 か月間で、気候変動、COVID-19、デジタル アクセスと教育といった主要な問題に取り組むさまざまな利害関係者とデータ連携を開始するなど、多くの進展がありました。この進捗状況については、ブログの更新をご覧いただけます。

気候変動 – 9 月 1 日、マイクロソフトは Allianz、Amazon、S＆P Global と共同で、Linux Foundation を中心とする新しい **Climate Finance Foundation** を立ち上げる計画を発表しました。これにより、投資コミュニティ、NGO、学術機関、その他の人々が、オープン ソースの分析とオープン データを用いて気候リスクと機会をより深く理解できるよう支援します。

COVID-19 – アラン チューリング研究所は、マイクロソフトおよびロンドン データ委員会の支援を受けて、グレーター ロンドン オーソリティ (Greater London Authority) と提携し、COVID-19 の制限が緩和された際のロンドンの「繁忙ぶり」や街中の動きを複数のデータ ソースを通じて調査し、人々がどのように変化に対応しているかを監視し、ロンドンの COVID-19 への対応と回復をサポートしました。

デジタル アクセスと教育 – BroadbandNow のサポートを受けて、10 月にオープン データ研究所と共同で **Open Data Challenge** を立ち上げ、デジタル アクセスと COVID-19 が若い学生の教育に与える影響を調査します。

マイクロソフトは、責任ある方法でデータをオープンにし、共有する方法を伝えるために、一連のデータ連携の原則を遵守すること、現代の主要な課題のいくつかに取り組むためにデータ

連携に参加すること、データ共有を容易にするための技術、ツール、およびガバナンス フレームワークを開発することに取り組んでいます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

3.2 イノベーションと業界クラウド

3.2.1.初の業界特化型のクラウドである Microsoft Cloud for Healthcare を 10 月末に提供開始

本日、Microsoft Cloud for Healthcare の一般提供が 2020 年 10 月末から開始されることを発表します。この包括的なクラウドにより、医療機関のお客様やパートナーは、より優れた体験、インサイト、および治療を世界中の人々に提供できるようになります。Cloud for Healthcare を活用することで、組織は患者により積極的に関わることができ、医療従事者に対してはワークフローの効率化、コラボレーションの合理化、既存のソース間でデータを接続してインサイトを行動に変えるためのツールを提供できます。

新しい業界専用のクラウド コンピューティング プラットフォームは、新規および既存の医療機能と医療向け共通データ モデルを単一の情報ソースに統合し、アプリケーション間の整合性を確保してシームレスな統合と相互運用性の向上を実現します。医療機関は、既存のプロセスや投資をサポートするようにアプリケーションをカスタマイズできます。Microsoft Cloud for Healthcare のアーキテクチャは、現在および将来のニーズに合わせて拡張され、さらに、組み込まれたデータ ガバナンスおよびプライバシー機能により、GDPR、HIPAA、HITRUST などの規制フレームワークに対するコンプライアンスもサポートします。

Cloud for Healthcare の機能は、マイクロソフトのクラウド プラットフォーム、コラボレーション、生産性、カスタマー リレーションシップ、ビジネス アプリケーション、分析ソリューション (Microsoft Azure、Microsoft 365、Microsoft Dynamics 365、Microsoft Power Platform など)、およびパートナーのヘルスケア ソリューションのエコシステムを通じて、ユーザーのために活用されます。また、マイクロソフトの Dynamics 365 や Power Platform のアプリケーションや、ヘルスケア パートナーがスタック全体で開発したアプリケーションで使用される医療患者および臨床のデータ モデルも含まれています。

これは、マイクロソフトが業界特化型のクラウドを一般提供した最初の例です。この業界特化型のクラウドを提供する取り組みの急速な進展 (5 月にパブリック プレビューを発表し、10 月末にリリース) は、特定の業界の課題に対処し、ビジネスの成果を推進するための適切な技術をお客様に提供するというマイクロソフトの姿勢を示しています。

詳細については、Microsoft Healthcare Industry のブログまたは Microsoft Cloud for Healthcare のサイトにアクセスしてください。

注:*ご希望に応じて、Microsoft Cloud for Healthcare に関する追加のモーション グラフィックと静止画を提供します。*

4.Microsoft 365

4.1 Cortana

4.1.1.Microsoft Teams、Outlook、および Windows 10 で Cortana の機能を強化

Microsoft 365 のパーソナル生産性アシスタントである Cortana は、Microsoft Teams、Outlook、Windows 10 で機能強化されています。更新とそのタイミングは次のとおりです。

- **Cortana 音声アシスタント**は、オールインワンの専用 Teams デバイスの新しいカテゴリである Microsoft Teams ディスプレイで一般提供され、ハンズフリー エクスペリエンスを提供して、会議への参加、電話の発信、チャット メッセージの送信、ファイルの共有などを行うことができます。米国では英語で 9 月から、オーストラリア、カナダ、イギリス、インドでは英語で数か月以内に提供が開始されます。Cortana 音声アシスタントは、今年後半に Microsoft Teams Rooms デバイスにも導入され、タッチレス エクスペリエンスを提供して、米国の共有スペースで会議に参加して終了することができます。
- **Cortanaからの毎日のブリーフィング メールは**、9 月から英語で Microsoft 365 Enterprise ユーザー向けに一般提供され、会議の準備を合理化し、Microsoft To Do と統合し、1 週間先の計画をサポートし、チームとのつながりを強化しようとしている人のマネージャーに専門的なインサイトを提供します。
- **Play My Emails** は、Cortana を使用してハンズフリーで受信トレイの新着情報を聞いて応答できる Outlook モバイル エクスペリエンスで、オーストラリア、カナダ、イギリス、インドで英語で数か月以内に公開されます。この機能は、すでに Outlook for iOS および Android で英語で利用できます。米国での英語版の Outlook for iOS の今月の更新により、ユーザーは携帯電話をポケットに入れて受信トレイを操作し、メールの送信者と通話を開始して、リアルタイムで会話を進めたり、 特定の人、時間、またはトピック、およびエクスペリエンスに複数の適格なアカウントを接続します。
- **Cortana in Windows 10** は、必要なものを見つける時間を節約して順調に進むのに役立つチャットベースのアプリで、米国での文書の検索と英語でのクイック メールの作成をサポートする一連の更新を 9 月から受け取るようになります。さらに、米国と英国で英語のウェイク ワードを使用して、アプリをハンズフリーで呼び出すことができるようになりました。会議の準備を効率化するために、来年初めに更新が行われます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.2 Excel

4.2.1 Excel ユーザーは、ライブ Power BI データセットに接続して、ピボットテーブルやその他のツールを利用可能

Excel ユーザーは、アプリケーションを離れることなく、ピボット テーブルなどの使い慣れたツールを使用して、ライブ Power BI データセットを検出して接続し、データを操作できるようになりました。データはライブ Power BI データに接続されているため、簡単に更新できます。機密ラベルまたは認定およびプロモート ラベルはすべて Excel に引き継がれるため、ユーザーは会社の IT 部門または専門家によって吟味されたデータを取得していることを確信しながら、組織のデータのセキュリティを確保し、偶発的な損失や誤用を防ぐことができます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.3 インサイトとウェルビーイング

4.3.1.Microsoft Teams と Outlook の新しいウェルビーイングと生産性に関するインサイトと機能

お客様が新しい仕事の世界で繁栄し、回復力を構築するのを支援するために、MyAnalytics と Workplace Analytics を利用した新しい繁栄と生産性のインサイトと機能が Microsoft Teams に登場します。個人、マネージャー、リーダーは、パーソナライズされた洞察と提案された行動を得て、変化を実現し、繁栄を生み出します。

チームの繁栄のための個人的なインサイトは、ネットワーク内の重要な人々との関係を強化し、焦点を必要とする重要なタスクのための時間を生み出すのに役立ちます。来年利用できるようになる新機能では、午前中に仮想通勤をスケジュールし、夕方には注意深く分離することができます。また、ヘッドスペースなどのアプリでマインドフルネスの専用の瞬間を作成し、感情的なチェックインを通じてユーザーとユーザーのチームがどのように感じているかを調整するのにも役立ちます。その日の推奨タスクなどの個人の生産性に関する重要な洞察は、Cortana からの毎日のブリーフィング メールと共に、その日の初めに Outlook の受信トレイに配信されます。この機能は、9 月から一般提供される予定です。

チームの Workplace Analytics からの組織的インサイトと機能は、マネージャーとリーダーが従業員の経験から傾向を見つけて対処するのに役立ちます。たとえば、インサイトはリーダーが、従業員が同僚や顧客とのつながりを維持しているかどうか、または彼らが長い就業日や過剰な労働負荷による燃え尽きのリスクがあるかどうかを理解するのに役立ちます。

特に明記されていない限り、これらの機能は 10 月にロールアウトされます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.4 IT Pro

4.4.1.Microsoft Endpoint Manager が、オンプレミスのリソースにリモート アクセスできる Microsoft Tunnel、ビジネス向け共有 iPad、Windows 仮想デスクトップなどのサポートを導入

多くの組織が引き続きリモート作業をサポートするか、新しいハイブリッド作業シナリオに拡大しているため、ユーザーがデバイスのどこからでも安全かつ生産的になることを可能にすることが重要です。Microsoft Endpoint Manager は、エンドユーザー エクスペリエンスを改善し、IT プラクティスを簡素化するためのいくつかの機能を公開プレビューを発表できることを待望しています。Microsoft Endpoint Manager は、Microsoft Intune と Configuration Manager を組み込んだ主要な統合エンドポイント管理ソリューションです。インテリジェント クラウド ツールを利用したアプリとデバイスの管理を提供し、Microsoft エンドポイント セキュリティ ソリューションとネイティブに統合されています。

更新には次のようなものがあります。

- **Microsoft Tunnel** は、Microsoft Endpoint Manager と統合されたリモート アクセス ソリューションにより、iOS および Android デバイスをオンプレミスのアプリやリソースに接続して、外出先で生産性を維持することができます。Microsoft Tunnel は、デバイス全体とアプリごとの仮想プライベート ネットワーク (VPN) とスプリット トンネリングをサポートし、条件付きアクセスと連携して、ネットワークへのアクセスを許可する前にデバイスがポリシーに準拠していることを確認します。これは公開プレビューで利用できます。

- Microsoft Endpoint Manager は**仮想エンドポイントの管理をサポートするようになりました**。これにより、Windows 仮想デスクトップ エンドポイント、またはサードパーティの仮想デスクトップ インフラストラクチャ (VDI) ソリューションを、物理 PC と同じコンソール内で管理できます。この機能は、2020 年末までに公開プレビューで利用できるようになります。

- お客様はすべてのエンドポイントを管理するために Microsoft を活用することを検討しており、**macOS で最高レベルの管理エクスペリエンスを提供して**、Mac 管理者にとって最も重要な生産性ニーズを満たしています。新しい機能には、スクリプトをデバイスに展開する機能、アプリ全体でシングル サインオン (SSO) を使用した新しい登録エクスペリエンス、およびApple の新しい管理対象アプリのライフサイクル機能が含まれます。これは公開プレビューで利用できます。

- Microsoft は、ユーザーが共有 iPad をユーザーに展開し、Azure Active Directory (AAD) 作業アカウントを使用してデバイスの個別のパーティションにログインできるようにする、**Shared iPad for Business** のサポートを発表しました。Shared iPad for Business UI は Microsoft Endpoint Manager に組み込まれており、ユーザーごとに個別のデバイス パスコードを設定するなど、個人の iPad で作業を行う必要があるユーザーにシームレスなエクスペリエンスを提供します。これは公開プレビューで利用できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.4.2.Office 展開のパブリック プレビューで利用可能な新しい管理機能とツール

Office 展開の新しい機能とツールが公開プレビューで利用できるようになりました。これにより、IT 専門家は最新の状態を維持し、すべての最新の価値をより迅速にビジネスに提供し、総所有コスト (TCO) を削減し、Microsoft 365 アプリへの投資効果を最大化することができます。

新しい機能とツールは次のとおりです。

- **インサイトと制御は**、環境内の Office クライアント アプリの詳細なビューを提供し、自信を持ってすばやくアクションを実行できるようにします。この機能には、クラウド経由でエンタープライズ デバイスを簡単に管理するための同意とオプトインが含まれます。アドインとデバイスのインベントリを表示します。セキュリティ パッチのコンプライアンスの目標とタイムラインを設定します。現在のセキュリティ パッチのコンプライアンスを確認してください。

- **予測可能なサービスの自動化**により、小さな更新による中断が少なくなり、ネットワーク使用率が最適化され、プロセスが合理化されます。この機能には、Patch Tuesday の予測可能性を追加する新しい月次エンタープライズ チャネル、以前のビルドにロールバックする機能、またはテナントの下の Multi-Access Edge Computing (MEC) デバイスの今後のビルドをスキップする機能が含まれます。
- **Office アプリのパフォーマンス、信頼性、セキュリティの向上に役立つ Office アプリの正常性と修復機能**。機能には、テナント アプリの正常性の概要、信頼性とパフォーマンスの回帰に関するアラート、アプリとチャネルごとの信頼性指標、さらにアプリとチャネルごとのパフォーマンス指標、アプリとビルドごとの正常性の詳細、推奨チャネルでのアクティビティの表示、診断データのカバレッジ、クラッシュカウントのあるデバイスのリストと、パフォーマンスと信頼性の時間傾向などがあります。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.4.3.生産性スコアでは、10 月の一般提供に先駆けて 3 つのカテゴリーを追加

以前に発表された生産性スコアは、組織が強力なテクノロジを使用して優れた作業を理解し、支援するのに役立つ **3 つの追加カテゴリとともに、10 月末まで一般提供されます**。

生産性スコアは、従業員エクスペリエンスとテクノロジ エクスペリエンスという 2 つの領域に焦点を当てています。これらは、組織の仕組み、改善点を特定するための洞察、およびスキルとシステムを更新するために実行できるアクションを提供します。

一般提供開始時に、生産性スコアに 3 つの新しいカテゴリが導入されます。従業員エクスペリエンスの 2 つのカテゴリは、**会議とチームワーク**が焦点となります。組織がチーム内で遭遇し、連携する方法が進化し続けるにつれ、包括的で一貫性のある効果的な連携方法を保証する、ベスト プラクティスとテクノロジを理解することが重要となります。

さらに、生産性スコアはテクノロジ エクスペリエンスに新しいカテゴリを追加します。**Microsoft 365 アプリの正常性**。このカテゴリは、パフォーマンスと最新性に関する洞察を提供し、重要なアプリを最新、安全、そして従業員のワークフローをサポートできるようにします。

これら 3 つの新しいカテゴリは、コンテンツ コラボレーション、モビリティ、ネットワーク接続、コミュニケーション、エンドポイント アナリティクスの可視性、洞察、アクションに加えて、組織が Microsoft 365 への投資を最大限に活用し、ビジネスの回復力とデジタル変革の目標を達成するのを支援します。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.5 Outlook

4.5.1.刷新された UI と機能の更新を取得するための予約

予約を行うと、組織は時間のかかる反復的なスケジューリング タスクに代わる、より迅速な方法を利用できるようになります。さまざまなスケジューリングのニーズに適合するように設計された組み込みの柔軟性とカスタマイズ オプションがあり、組織がスケジューリングに費やす時間を減らし、顧客やエンド ユーザーとの会議により多くの時間を費やすのに役立ちます。

予約の更新には、新しいユーザー エクスペリエンスが含まれ、汎用性のために構築された新鮮なデザインが含まれます。新機能と製品の機能強化により、予約の使用方法と展開方法をさらにカスタマイズして、組織全体で制御できるようになります。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.5.2.Outlook の新しいモバイル機能拡張により、柔軟性と制御性が向上

Outlook for iOS および Android のいくつかの機能強化により、モバイル エクスペリエンスがパーソナライズされ、音声で実行できることが拡張され、連絡先管理が合理化されます。これらの更新は、安全に接続を維持し、リモートで作業するための柔軟性が必要な場合を含めて、いつでも作業を行えるように設計されています。Outlook モバイルの新機能は次のとおりです。

- Outlook for iOS および Android 向けの **Play My Emails** は、カナダ、オーストラリア、インド、英国でまもなく利用可能になる予定です。そして 9 月には、Cortana に iOS で特定の人、時間枠、トピックからのメールを読むように依頼できるようになります。
- メールの作成、電話、スケジュールのための**音声コマンド**は 10 月からご利用いただけます。
- カテゴリ別の**連絡先フォルダーの電話との同期**は 10 月からご利用いただけます。
- 受信トレイを埋めることなく、絵文字を含むメール**対応**できるようになるのは、今年の終わり頃です。

- アプリの入手方法を簡素化して仕事用アカウントを認証する **QR コネクト**は、10 月下旬に利用可能になります。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.5.3.新しい Outlook for Mac は Microsoft Sync 技術を採用し、OS の更新をサポート

新しい Outlook for Mac は、来月までにすべての Outlook for Mac ユーザーが利用できるようになり、パフォーマンスと信頼性を強化するために Microsoft Sync テクノロジを使用して構築されています。Outlook は Office for Mac アプリ スイートの一部であり、Mac ユーザーが使いやすいように特定の要素と macOS Big Sur をサポートするように設計されています。アプリ全体でのウィジェット サポートの展開と、Apple Watch および iOS14 向けの Outlook の機能強化により、ユーザーはさまざまな Apple デバイス間で接続を維持できます。

新しい Outlook for Mac は、ユーザーをシームレスに新しいエクスペリエンスに転送する新しい Outlook トグルから利用できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.6 Project Cortex

4.6.1.高度な AI を使用して理解を促進する企業向けコンテンツ管理の SharePoint Syntex を導入

昨年 Microsoft は Project 365 を発表しました。これは、高度な人工知能 (AI) を使用して日常的に使用するアプリの知識と専門知識を持つ人々にパワーを与える Microsoft 365 イニシアチブです。プライベート プレビュー中に提供されたお客様のフィードバックに基づいて、これらの AI を利用した機能を一連の独自のイノベーションとしてお客様に提供します。

最初に提供する製品は SharePoint Syntex です。これは、高度な人工知能 (AI) を使用してコンテンツのキャプチャ、取り込み、分類を自動化し、プロセスを加速し、コンプライアンスを改

善し、知識の発見と再利用を促進します。この AI を利用したコンテンツの理解は、SharePoint の基本的なコンテンツ サービスに基づいて構築され、コンテンツ管理の超能力を提供します。

SharePoint Syntex を使用すると、コードなしの AI モデルの場合と同じように、ドキュメントを読み取って情報を抽出するよう AI に教えることができます。そして、モデルを使用してコンテンツを自動的に処理し、情報を抽出してメタデータを適用します。豊富なメタデータを使用すると、コンテンツをより簡単に見つけて操作できるほか、機密性ラベルと保持ラベルを自動的に適用して、コンプライアンスに対応し、注目に値するファイルにフラグを付けるなどのプロセスを合理化できます。

SharePoint Syntex は、10 月 1 日に Microsoft 365 の法人顧客が購入できるようになります。SharePoint Syntex に加えて、情報をトピックに整理し、Microsoft 365 全体で豊かな従業員体験を可能にする知識を提供する新しいサービスを今年後半にリリースします。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.7 Microsoft Search

4.7.1.新しい Microsoft Search がイノベーションが、どこからでも利用可能に

今年後半に予定されている **Microsoft Search** の新しいイノベーションにより、どこからでも、必要なものを簡単に見つけることができます。

Microsoft Teams で、新しい検索エクスペリエンスにより、チャットやチャネルのコンテキストで回答、人、ファイル、会議、メッセージを見つけることができます。Microsoft Search はまた、パーソナライズされた検索結果を **Windows デスクトップ検索**ボックスにもたらし、デスクトップ検索、Office.com、SharePoint、Bing、Edge 全体で一貫した検索エクスペリエンスを作り出します。

スキルとプロジェクトおよびユーザー プロファイルの AI による強化により、専門知識の場所が改善されます。また、新しい AI を豊富に活用した**画像検索**により、組織全体の写真、ロゴ、その他の画像を見つけることができます。

Microsoft Graph コネクタの一般提供により、Microsoft 365 だけでなく、パートナーからの 100 を超える固有のコネクターに加えて、数十の外部サービス全体を検索できます。

Microsoft 365 の Microsoft Search Admin Feedback は、従業員が検索エクスペリエンスについて管理者にフィードバックを送信する機能を提供し、結果の価値または個人の個々の検索成功率を理解することにより、ユーザーの関心を維持できるようにします。 Microsoft Search の新しいフィードバック機能を使用すると、検索結果の品質に関するフィードバックを検索管理者に安全に提供し、回答を提案し、組織の検索ライフサイクルのパートナーになることができます。 **改善された使用法と分析の**エクスペリエンスは、従業員の検索体験を向上させるために、組織での検索の使用方法をよりよく理解するのに役立ちます。

Microsoft Search は、Microsoft サービス全体の範囲を拡大するため、**Azure Cognitive Search との統合を含んでいます。**そのため、"境界のない" まとまりのある一貫した検索エクスペリエンスを作成し、モバイル、Web、およびカスタムの基幹業務アプリケーションなどの既存の Azure Cognitive Search インデックスからのクエリ結果を表示できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.8 SharePoint および Yammer

4.8.1.新しい Microsoft 365 ツールが職場のコミュニケーションをサポートおよび強化

職場のコミュニケーションのための一連の新しい Microsoft 365 ツールにより、組織はニュースやお知らせの可視性を高め、従業員をリーダーシップとより適切に結びつけ、より緊密な職場コミュニティを育成することができます。これらの新しい機能は次のとおりです。

- **SharePoint の機能を強化します。**コミュニケーターは、日付やその他の設定に基づいて、X 回表示されるまで、読むまで後押しなどの設定を使用して、主要なニュースとお知らせを優先して従業員フィードの上部に表示できます。
- **共有機能.**コミュニケーターは、ニュース項目を SharePoint、メール、チーム、および Yammer に 1 回のクリックで共有できます。

- **Yammer All Company フィードと配信の保証。**Yammer の All Company フィードを介してニュースとお知らせを共有し、従業員の受信トレイへの配信を保証します。
- **Communicators のためのインサイト。**コミュニティ管理者や企業のコミュニケーターは、SharePoint の新しい分析機能を使用して、Microsoft 365 全体でのリーチ、影響、関与を理解できます。コンテンツの滞留時間、インタラクションのヒートマップ ビュー、AI を利用した自動分析ダイジェスト、更新されたコミュニティ インサイトによるより優れたインサイト、ライブ イベントと質問と回答のより詳細な分析などの Yammer の機能が含まれます。
- **組み込みテンプレート。**組織は、リーダーシップ接続サイトなど、Microsoft 365 のすべての部分を活用して、ニーズやシナリオに合わせて簡単にカスタマイズできる組み込みのテンプレートを使用して、堅牢なシナリオをすばやく展開できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.8.2.Yammer で知識を共有し、専門家同士のつながりに大きな役割を果たすクラウドソーシング

組織全体で人々がつながり知識を共有できるようにすることが、これまでになく重要になりました。今後数か月以内に、それを可能にする新機能が Yammer に展開されます。

- **質問に対する回答のクラウドソーシングと賛成投票:** Yammer での質問に対する特定の返信は、ユーザーが "投票" できるようになります。
- **Azure B2B を使用する外部ゲストを含むコミュニティ:** コミュニティの管理者は、組織外のユーザーを会話に参加するよう招待できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.9 Microsoft Stream

4.9.1.新たに設計された Stream により、Microsoft 365 のビデオ共有が簡素化

Microsoft Stream — Microsoft 365 のインテリジェント ビデオ アプリ — が再考され、スイート全体のアプリケーションとシームレスに統合できるように再構築されているため、Office ド

キュメントと同じくらい簡単にビデオを作成、共有、発見できます。新しいストリームは、今年の第 4 四半期に利用可能になります。

Microsoft 365 に保存されるビデオでは、SharePoint の豊富なコンテンツ管理機能に基づいて新しいエクスペリエンスが構築され、Microsoft Graph のインテリジェンスを利用して、外部と匿名の共有、Microsoft Search との統合、強化された分析、トランスクリプト品質の向上、セキュリティとコンプライアンスのための新しいコントロールなど、待望の機能を提供します。

クラシック ストリームを使用しているお客様は、新しいストリームへの移行が今後数か月間サポートされ、Microsoft 365 の新機能、移行ツール、ガイダンスが段階的に導入されます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10 Microsoft Teams

4.10.1.Microsoft Teams に新しい通話機能がまもなく登場

連絡先、ボイスメール、通話履歴を一度に表示する簡素化されたビューを含む、Microsoft Teams 内の通話エクスペリエンスのための多くの機能強化が今年後半に予定されており、ワンクリックで簡単に通話を開始または返すことができます。

その他の機能強化は次のとおりです。

- **コラボレーションコール、**これにより、顧客はコール キューを Teams チャネルに接続できます。ユーザーは、キューにある通話を取りながら、チャネル内で情報を共有および共有できます。この機能は、IT ヘルプ デスクや人事ホットラインなどのシナリオに最適です。IT 管理者はコール キューを特定のチャネルにすばやく接続でき、チーム オーナーは設定を管理できます。
- **1 対 1の通話で利用できる人気の会議機能。**これらには、文字起こし、ライブキャプション、録音、Teams モバイル アプリとデスクトップ アプリ間の転送機能が含まれます。トランスクリプトと録音は、通話後にチャット ウィンドウに保存されます。これらの機能は、[通話] ウィンドウ内の**コントロール** バーから有効にできます。

- アンビエントタッチスクリーンと Cortana によるハンズフリーエクスペリエンスを備えたオールインワン専用 Teams デバイスの新しいカテゴリである **Microsoft Teams ディスプレイ**は、今後数週間で一般提供されます。自然言語を使用すると、ユーザーは Cortana に会議への参加とプレゼンテーション、Teams チャットへの返信の指示などを依頼できます。
- スマートフォンの近代化を検討しているお客様のために、Microsoft は AudioCodes、Poly、および Yealink と協力して、一般的な分野向けに設計された手頃な価格の **Microsoft Teams スマートフォン**の新製品を提供しています。さらに、Teams デバイスのポートフォリオは、ダイヤル パッドと最新の Teams ユーザー インターフェイスを備えた新しい **USB 周辺機器**で強化されています。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10.2.Teams のチャットとチャネルの会話を強化することで、コミュニケーションを効率化

Teams で、次のチャットやチャネルの会話の新機能が利用可能になりました。

- 利用可能になった **Teams テンプレート**により、新しいチームのセットアップがさらに簡単になります。テンプレート オプションには、事前定義されたチャネル、タブ、アプリ、および業界固有の役割ベースのシナリオに対応する設定のセットが含まれています。テンプレートには、プロジェクト管理や従業員のオンボーディングなどの一般的なアクティビティのほか、*店舗の整理*、*小売マネージャーのコラボレーション*、*患者ケアのコラボレーションなどの業界固有の第一線で働く人々のためのテンプレートが含まれます*。IT 専門家は、組織のカスタム テンプレートを作成して、チーム構造を標準化し、関連するアプリを明らかにし、ベスト プラクティスを拡張することもできます。
- 今回利用可能になった**情報ウィンドウ** では、各チャネルのアクティブ メンバー、重要な投稿、その他の関連情報の概要が一目でわかります。これは、スピードに追いつきたい新しいメンバーや、最新情報を知りたい既存のメンバーにとって価値があります。
- **今年は、個々のチームのメンバー数の上限が 25,000** に拡大されます。Teams テナントの人数には既に制限はありませんが、個々のチームのサイズ制限は、最大 25,000 人のメンバーをサポートするために増やされています。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10.3. 新しい Microsoft Teams の体験がコラボレーションを向上させ、会議を改善

会議をよりダイナミックで包括的で魅力的なものにするために、多数の新機能が Teams に登場します。さまざまな講堂、会議室、コーヒーショップなど、いくつかの新しい **Together モード シーン**が今年後半に登場します。プレゼンターは、すべての会議出席者の**既定のシーン**として、ギャラリーからシーンをすぐに選択できるようになります。さらに、Together モードには、機械学習を使用して、参加者がカメラからどれだけ近いか離れているかに関係なく、仮想座席に参加者を**自動的にスケーリングして中央に配置する**拡張機能があります。

さらに、**カスタム レイアウト**を使用すると、発表者は会議中に参加者に会議コンテンツがどのように表示されるかをカスタマイズできます。たとえば、参加者が画面に表示されているコンテンツの前景に置き換えられたプレゼンターのビデオ フィードを表示することを選択できます。この機能は、背景ぼかしと Together モードで採用されているのと同じ AI セグメンテーション テクノロジを使用して、より動的なコンテンツ視聴エクスペリエンスを提供します。プレゼンターは、視聴者にスピーカーとコンテンツのどちらかを選択させることなく、手のジェスチャーや顔の合図を通じて簡単に聞き手の注意を向けることができます。

今年の終わりまでに登場する**小会議室**では、会議の主催者が会議の参加者を小さなグループに分割して、ブレインストーミング セッションやワークグループ ディスカッションを促進できます。プレゼンターは小会議室の間を飛び回り、すべての小会議室にアナウンスを行い、会議室を閉じて全員をメイン会議に戻すことができます。

20 を超える**パートナー アプリ**がこの 10 月に登場し、ミーティングの拡張性が一般提供に移行し、Teams ユーザーはサードパーティ アプリを使用して Teams ミーティング エクスペリエンスをカスタマイズできるようになります。HireVue、ServiceNow、Range、Buncee、PagerDuty は、今後数か月で展開される予定のアプリの一部です。利用可能になると、これらのアプリは AppSource または Teams ストアのいずれかからアクセスでき、会議の主催者が会議をスケジュールするときに追加できます。

さらに、**スピーカーの属性付きのライブ キャプション**が一般提供されました。会議後、会議の記録、トランスクリプト、チャット、共有ファイルなどの**要約**が会議の［チャット］タブの参加者と共有され、各会議の［詳細］タブに表示されます。これにより、チームは会議を順調に進め、会議の終了後も作業を進めることができます。

Teams 会議は、完全な会議エクスペリエンスで最大 1,000 人の参加者をサポートするまでに成長しています。追加の制御を必要とする大規模な会議やイベントの場合、Teams はシームレスにスケーリングして、**ライブ キャプションを使用する機能を含む表示のみの会議エクスペリエンスで** 20,000 人の参加者をサポートできます。これらの新機能は、新しいアドバンストコミュニケーション プランをご利用のお客様にご利用いただけます。

カスタマー プレゼンテーションなどのより構造化された会議では、**自動メール**を使用した**出席者の登録**により、会議後の出席の管理と**レポート ダッシュボードの表示が容易になり、**出席者のエンゲージメントを理解できます。また、Microsoft Teams の NDI などの**新しい制作ツール**を使用すると、誰でも、各参加者のビデオを個別のビデオソースに変換することで Teams 会

議を仮想ステージに変換できます。これは、選択した制作ツールを介して、プロフェッショナルなメディア ブロードキャストやソーシャル コミュニティへのストリーミングに使用できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10.4.電子カルテの統合により強化された Microsoft Teams での仮想医療

世界的なパンデミックへの対応として、多くの医療機関は遠隔医療の提供を強化し、遠隔医師の診察を可能にし、Microsoft Teams との遠隔医療ワークフローをサポートしています。新しい **Microsoft Teams EHR コネクターが**プライベート プレビューされ、臨床医と患者が仮想患者訪問を行ったり、EHR システムから直接 Teams の別のプロバイダーに相談したりできるようになります。これにより、医師と患者のエクスペリエンスが合理化され、より質の高いケアのサポートに役立ちます。

Epic EHR システムは、この方法で初めて Teams と統合される予定であり、チームは今年後半に Epic App Orchard で利用可能になるため、Epic EHR システムから直接、Teams で EHR に接続された仮想訪問を開始できます。他の EHR システムのサポートは近日提供予定です。

さらに、Nuance Dragon Ambient eXperience (DAX) が Microsoft Teams と統合され、Microsoft Teams 内の医師と患者の会話を安全にキャプチャーしてコンテキスト化し、遠隔医療訪問のための自動臨床ドキュメントを提供します。Nuance DAX と Teams の統合は、プライベートプレビューで利用できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10.5.重要な業務のデジタル変革が加速する中、Microsoft Teams の新機能が第一線で働く人々を支援

Microsoft Teams のさまざまな更新と新機能は、これらの重要な従業員がビジネス継続性の最前線にいるときに、第一線で働く従業員のつながり、生産性、認識を維持するのに役立ちます。

新機能は次のとおりです。

- **シフトのスケジュール支援**が利用可能になりました。これは、スケジュールの作成中またはスケジュール変更リクエストの承認中に発見された競合をスケジュールすることをマネージャーに警告します。この機能はマネージャーの時間を節約し、スケジュールをより効率的にし、不正確さを減らします。

- **シフトごとのタグ付け**，が利用可能になり、現在担当しているすべての看護師に送信されるメッセージなど、Teams のメッセージを、その役割と彼らが働いているシフトに基づいて受信者グループにターゲティングできるようになりました。ユーザーは、Teams のシフト アプリのスケジュールに基づいて自動的にタグに割り当てられます。これにより、AMiON、JDA、Kronos などの主要な労働力管理システムとの統合が可能になります。
- **シフト外のアクセス制御**が利用可能になりました。IT 管理者は、従業員が勤務時間外に個人用デバイスでアプリにアクセスしているときに従業員に警告するようにチームを構成できます。この機能は、従業員が勤務時間外に不本意に働いていないことを確認し、雇用主が労働規制を遵守するのに役立ちます。
- **カスタマイズ可能な賞賛バッジ**が利用可能になり、組織は会社のブランドや価値観を使用して従業員の認識をカスタマイズできます。IT 管理者は、人事などの従業員エンゲージメント チームと協力して、チーム管理センターで新しい賞賛のバッジを設定できます。マネージャーとチーム メンバーは、任意のチャネルのメッセージ作成ボックスの下にある賞賛のアイコンをクリックして、同僚に賞賛を送ることができます。
- **Teams と RealWear ヘッドマウント デバイスの統合**が利用可能になり、大声で危険な環境で状況認識を維持しながら、現場作業員が音声制御のユーザー インターフェースを使用して 100% のハンズフリーを維持できるようになりました。RealWear HMT-1 および HMT-1Z1 デバイスを使用している第一線の作業員は、Teams のビデオ通話を使用してリモートの専門家と協力し、音声コマンドのみを使用してチャットやその他のリソースにアクセスし、完全にハンズフリーで通話とフィールド操作を行うことができます。現場作業員は、リアルタイムで表示内容を表示することで、問題解決の時間を短縮し、承認を得て、コストが高くつくダウンタイムを削減できます。
- **Microsoft Teams Walkie Talkie** が Android で利用できるようになりました。これは、従業員または会社所有の Android デバイスをトランシーバーに変えて、携帯電話ネットワークまたは Wi-Fi を使用してクラウド経由で瞬時に安全な音声通信を行うプッシュツートーク エクスペリエンスです。Teams のこのネイティブ組み込みアプリは、従業員が携帯する必要のあるデバイスの数を減らし、IT コストの削減に役立ちます。Walkie Talkie は Wi-Fi またはセルラーデータを介して動作するため、現在アナログ ラジオ デバイスを使用しているお客様は、部外者からの漏話や盗聴や限られた範囲の無線について心配する必要はありません。また、プッシュトゥトークのエクスペリエンスがまだ有効になっていないチームの場合、Walkie Talkie in Teams を使用すると、事前に構成されたチャネルを使用して、適切なユーザーと適切に会話できるようになり、チームとすぐにコミュニケーションできます。Teams Walkie Talkie は、専用のプッシュツートークボタンを備えた新しい Samsung Galaxy XCover Pro を含む BlueParrott、Klein Electronics、Samsung の専用デバイスとネイティブに統合されており、企業は自社のニーズに合わせてさまざまな産業用フォームファクターから選択できるようになりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10.6.ハイブリッドなワークプレースをサポートする新たな会議室体験

多くの組織がリモートからオンサイトのハイブリッド作業全体でリモート作業から従業員のサポートに移行するにつれて、新しい Microsoft Teams Rooms 機能は、自宅から会議に参加する人々の社会的距離感、タッチレス ミーティング エクスペリエンス、およびより包括的で協調的なエクスペリエンスを実現していきます。

これらの新機能は、特に明記されていない限り、年末までに利用可能になります:

- **会議室のキャパシティの通知。**この機能は、人数カウント テクノロジーを備えた会議室のカメラからのデータを使用して、IT 管理者が定義したキャパシティ データに基づいて会議室が定員を超えた場合に、会議の参加者に警告します。
- **タッチレス エクスペリエンス**をサポートする 4 つの機能:
    - **Microsoft Teams Rooms のルーム リモート。**Teams モバイル アプリの新しいエクスペリエンスにより、ユーザーはセンター コンソールに触れることなく室内デバイスを制御できます。コントロールには、会議への参加と退出、会議室のミュートとミュート解除、オーディオ音量の調整、カメラのオン/オフなどがあります。
    - **Microsoft Teams Rooms での Cortana 音声アシスタントのサポート。**シンプルな音声コマンドで、ユーザーは会議室のコンソールに触れることなく、会議に参加して終了できます。追加のコマンドは時間の経過とともに追加されます。
    - **Surface Hub の近接結合。**ユーザーは自分の PC またはモバイル デバイスから Surface Hub の会議に参加できます。会議の参加前のエクスペリエンスでは、近くの会議室のオーディオ デバイスが表示され、ユーザーは使用したい会議室のデバイスを選択して、**会議室のオーディオとビデオを使用して参加できます。**一方、ユーザーの個人用 PC またはモバイル デバイスは、音声フィードバックを回避するために自動的にミュートされます。このエクスペリエンスは現在、Microsoft Teams Rooms でも利用できます。
    - **Microsoft Teams Rooms の Teams Casting。**臨時の対面セッションでは、Teams Casting を使用すると、スマートフォンから直接ワイヤレスで接続し、近くの Teams Rooms デバイスにコンテンツを表示できます。今後、この機能は PC でも利用できるようになります。

- **Teams パネル。**この新しいカテゴリのデバイスは、会議スペースの外に取り付けてスペース管理を合理化し、スペースと会議の詳細を表示し、スペースを予約し、今後の予約を表示し、現在の空き状況を簡単に識別することができます。ユーザーは建物のフロアプランを表示し、“近くの部屋“ 機能を使用して別の部屋を予約することもできます。
- **Microsoft Teams Rooms と Surface Hub での調整された会議。**Surface Hub と Microsoft Teams Rooms のデバイス調整により、ユーザーは同じ会議中に同じ部屋で両方の種類のデバイスを操作できます。1 つのデバイスがオーディオとビデオを管理し、他のデバイスはオーディオ フィードバックを回避するために自動的にミュートされます。この機能により、Surface Hub を使用して協調的なホワイトボード セッションを実施しながら、部屋のディスプレイの前面を使用して会議ギャラリーに出席者を表示することで、画面の領域を最大化できます。Team Hub の Surface Hub と Microsoft Whiteboard のホワイトボード エクスペリエンスにより、ユーザーは場所に関係なく、同じキャンバスに一緒に描画したりインクを塗ったりできます。さらに、Microsoft Teams Rooms と Surface Hub には、7x7 グリッド ビューと Together モードを含む新しいビデオ ギャラリー ビューが表示されます。
- **Teams Admin Center の新しい会議室管理機能。**Teams Admin Center は、Teams 電話、Teams ディスプレイ、Teams Room などの通話デバイスと会議デバイスをすべて 1 つの場所から管理するための改善されたポータル エクスペリエンスを提供するようになりました。新機能には、すぐにトラブルシューティングを行うためのデバイス ヘルス モニタリング アラート、専用のデバイス管理管理者ロールまたは Microsoft パートナーへの安全な委任が含まれます。
- **Microsoft Teams Rooms Premium の追加の管理機能。**7 月の Microsoft Teams Rooms Premium の一般提供開始後、2020 年末までに、セキュリティ監視やファームウェア更新管理などの新しい監視機能がサービスに含まれるようになります。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください**。

4.10.7.Microsoft 365 の新機能により、Teams がコラボレーションのためのより便利なハブに

Microsoft 365 に追加された多数の新機能にチームでアクセスできるため、会社の情報、洞察、アプリをコラボレーションおよび検索するためのさらに強力なハブになります。これらの項目の一部は、Book of News の他のエントリにも記載されていることに注意してください。

- MyAnalytics と Workplace Analytics を利用した**新しい繁栄の機能と生産性のインサイト**が 10 月に Microsoft Teams に登場します。個人、マネージャー、ビジネス リーダ

ーは、習慣を変え、生産性と幸福を改善するための推奨アクションを使用して、自分の役割に合わせてインサイトとを得ることができます。仮想通勤、ヘッドスペースなどのアプリとの統合、エモーショナル チェックイン エクスペリエンスなど、新しい個人の繁栄機能が来年利用できるようになります。

- **Teams の新しい検索エクスペリエンス**が Microsoft Search を搭載して 2020 年末までに利用可能になり、メッセージ、ユーザー、ファイルをより迅速かつ直感的に見つけることができるようになります。再設計された検索結果ページは、より良いコンテキストとより高速な結果を提供し、チームやその他の Microsoft 365 サービスで最も関与している人とコンテンツに基づく AI を利用した関連性を備えています。
- 新しい**ホーム サイト アプリ**は、SharePoint ホーム サイトとその他のイントラネットの機能を直接チームにもたらし、チーム、コミュニティ、リソースへのカスタマイズ可能な命名、ブランディング、マルチレベル ナビゲーションにより、従業員に組織のイントラネットへのゲートウェイを提供します。今年後半には、アプリの名前とアイコンが組織のブランドに一致して、Teams のアプリ バーに固定できるようになります。そのため、検索やニュースや重要なサイトのパーソナライズされたビューにすばやくアクセスできます。
- **チャットとチャネルからタスクを作成し**、数週間以内に利用可能になります。アプリやウィンドウを切り替えることなく、Teams のチャットやチャネルの会話からタスクをすばやく作成できます。Teams メッセージの［その他のオプション］を選択して、タスクアプリで［タスクの作成と追跡］を選択します。
- **Yammer 統合**が今年後半に利用可能になります。Teams で新しい Yammer コミュニティアプリを使用しているユーザーは、チームのアクティビティ フィードで Yammer の通知を確認でき、Teams の検索バーを使用して Yammer の会話を見つけることができます。
- **ストリームの再生パフォーマンスと新機能**が、新しいストリーム エクスペリエンスの一部として、年末までに Teams 会議のレコーディングに登場します。更新には、外部と匿名の共有、Microsoft Search との統合、分析の強化、トランスクリプト品質の向上、記録への迅速なアクセス、セキュリティとコンプライアンスの新しい制御が含まれます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

4.10.8.Microsoft Teams のパワー プラットフォームが更新され、ローコードのアプリ、ボット、および自動化されたワークフローをより簡単に利用可能

Teams のパワー プラットフォーム機能の新しい更新により、誰もがワークフローを自動化し、アプリとボットを構築して使用し、すべて 1 か所でデータを操作することが容易になります。

今年登場する Teams の新しい**Power Automate アプリ**では、使いやすいテンプレートとシンプルなビルド エクスペリエンスにより、ワークフローの自動化が容易になります。Power Automate は、Adobe Sign などの**電子署名サービス**を統合して署名プロセスを自動化する機能など、Teams での自動承認プロセスも有効にします。

今年後半に公開プレビューで公開される Teams の Power BI アプリの機能強化により、組織全体からデータを見つけやすくなり、チーム内で Excel データセットから視覚化をすばやく作成し、より効率的にコラボレーションして、リアルタイムのインサイトに基づいて意思決定を行うことができます。ユーザーがデータを見つけて分析するための一元化された場所をアプリが作成すると同時に、埋め込みチャネル、チャット、会議の経験を備えた Excel とチームの使用を強化しました。

エンタープライズ リレーショナル データストアに豊富なデータタイプを Teams ユーザーに提供する、Teams 用の新しい組み込みローコードデータ プラットフォームである Project Oakdale が、公開プレビューされました。Teams 向けの Power Apps および Power Virtual Agents アプリには、どちらも今年リリースされる組み込みアプリとボット作成スタジオが含まれており、Teams を離れることなく誰でもアプリやボットを作成できます。

パワー プラットフォームで構築されたソリューションは、Teams アプリストアに簡単に公開でき、既製として使用したり、特定のニーズに合わせてカスタマイズしたりできます。Power Virtual Agents ボットは、それらと対話するユーザーを識別し、パーソナライズされたユーザー固有のリターンで応答できます。たとえば、会社の人事ポリシーについてボットに問い合わせる従業員には、その地域または国に適用可能な特定のポリシーが提供されます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.セキュリティ、コンプライアンスおよび ID

5.1 セキュリティ

5.1.1 Microsoft Defender が Microsoft 365 と Azure 全体を脅威から保護します

Microsoft は脅威保護ポートフォリオを拡張する新機能を発表し、Microsoft 365 のセキュリティと Azure のセキュリティにまたがるソリューションを統合して、市場で最も包括的な拡張検出と応答 (XDR) を提供します。Microsoft Defender には Microsoft 365 Defender と Azure Defender が新たに含まれ、ID、エンドポイント、アプリケーション、メール、インフラストラクチャ、クラウド プラットフォーム全体の脅威を防止、検出、対応し、影響を受けた資産を自己修復します。

Microsoft Threat Protection は **Microsoft 365 Defender** となり、エンドユーザー環境のための XDR。

- **すべての主要な OS の保護:** Microsoft Defender Advanced Threat Protection が登場**Microsoft Defender for Endpoint** は、急速に進化するモバイル脅威の世界に対する保護を拡大しています。Androidの場合、フィッシングに対する保護を提供し、悪意のあるアプリケーションとファイルのプロアクティブなスキャンを提供し、企業リソースへのアクセスをブロックして侵害の影響を軽減し、セキュリティ チームがセキュリティ センターを介してモバイルの脅威とアラートを確認できるようにします。iOSの場合、フィッシングと Web 保護、および同じ統合 SecOps エクスペリエンスも利用できます。macOS のサポートは、脅威と脆弱性の管理の公開プレビューによって拡張されました。(クロスプラットフォームのエンドポイント保護の詳細をご覧ください。)

- **Protecting priority email accounts:** Office 365 Advanced Threat Protection が **Microsoft Defender for Office 365 になりました。**現在、公開プレビューでは、セキュリティ チームは、組織内で最も目立つ、最もターゲットが絞られた個人の保護に優先順位を付け、優先アカウントとしてタグ付けし、ポータルで追跡できます。(優先アカウント保護の詳細をご覧ください。)

- さらに、Azure Advanced Threat Protection は現在 **Microsoft Defender for Identity** であり、お客様にハイブリッド ID 脅威保護を提供し続けています。

Azure Security Center のクラウド ワークロード保護機能は、仮想マシン、データベース、コンテナー、IoT などの Azure およびハイブリッド リソース用の XDR である **Azure Defender** になりました。Azure Security Center は引き続き中心となるダッシュボードであり、Azure Secure Sc

ore によるクラウド セキュリティ ポスチャー管理機能を提供し、Azure Defender および Ignite の他の Azure Security Center 機能に関するより深いインサイトと推奨事項を提供します。新しい Azure Defender は、9 月下旬に既定のエクスペリエンスとなり、ここからアクセスできます。

- **SQL データベースと仮想マシンをどこからでも保護:**Azure Arc のサポートにより、Azure Defender はオンプレミスおよびマルチクラウド環境の SQL サーバーと他のクラウドの仮想マシンを保護し、これらのリソースのオンボーディングと管理を簡素化します。
- **コンテナの保護を強化:**コンテナー、特に Kubernetes がより広く使用されるようになると、Kubernetes 向けの Azure Defender の提供が拡張され、Kubernetes レベルのポリシー管理、強化、アドミッション コントロールによる実施が含まれ、Kubernetes のワークロードが既定で確実に保護されるようになりました。さらに、Azure Defender for Container Registries によるコンテナー イメージ スキャンは、コンテナー イメージの継続的なスキャンをサポートし、実行中のコンテナーの悪用を最小限に抑えます。
- **運用テクノロジー ネットワークでの IoT の保護:** Azure Security Center for IoT が **Azure Defender for IoT になりました。**最近の CyberX の買収により、Azure Defender for IoT は、お客様が安全、健康、食品、水、エネルギー、輸送、国防を依存している OT ネットワークの IoT デバイスにエージェントレス セキュリティを提供するようになりました。この統合により、グリーンフィールド デバイスとブラウンフィールドデバイスの両方で、継続的なIoT / OT資産の発見、脆弱性管理、および脅威の監視が可能になります。セキュリティ情報とイベントマネージャー (SIEM) であるAzure Sentinelとの統合により、OT 固有の SOAR プレイブックに加えて、IT ネットワークと OT ネットワークの両方にわたる統合セキュリティ モニタリングとガバナンスが提供されます。

不動産全体の脅威を総合的に保護するために、Microsoft Defender は、クラウドネイティブの SIEM **Azure Sentinel** と統合され、企業全体の可視性と実用的なインサイトが得られるようになりました。Azure Sentinel は、Microsoft Defender やその他の Microsoft およびサードパーティ システムからのデータを集約および分析して、攻撃のエンドツーエンドのビューを提供し、最も重要な脅威に優先順位を付け、自動化プレイブックを介して対応します。防御側は、組み込みコネクターを使用してあらゆるデータを簡単に接続できます。

Microsoft Defender、Azure Defender、Azure Sentinel の詳細については、こちらをご覧ください。

5.1.2 Microsoft 365 が Application Guard と Office を統合し、ユーザーの生産性と保護を維持

Microsoft 365 は Application Guard と Office を統合して Safe Documents に接続し、ユーザーに生産性と保護を提供する単一の完全なエクスペリエンスを提供します。現在公開プレビューされている機能により、Microsoft 365 E5 のお客様は、組織の外部から Office ドキュメ

ントへの変更を編集、印刷、および保存でき、ハードウェア バックアップのセキュリティで保護されます。

Application Guard を使用すると、ユーザーは、カーネルの別のコピーにある Windows 10 の独自のインスタンスを使用して、安全な仮想コンテナーでドキュメントを開きます。信頼できないファイルが悪意のあるファイルである場合、ユーザーデータと ID は変更されないまま攻撃が阻止されます。ユーザーがドキュメントを信頼してネットワークに保存したり、リアルタイムで共同作業を開始したりする場合、Safe Documents は、ドキュメントを開く前に、既知のリスクと脅威のプロファイルに対してドキュメントをチェックします。

Microsoft 365 は、Windows プラットフォーム Antimalware Scan Interface (AMSI) との統合も追加して、Excel 4.0 マクロをスキャンし、攻撃者が利用する難読化と回避をさらに阻止するのに役立ちます。

これらの機能は、Microsoft 365 アプリ、Windows 10、Microsoft Defender for Endpoints (以前の Microsoft Defender Advanced Threat Protection) 間のシームレスな統合によって実現されたものです。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.2 コンプライアンス

5.2.1 次世代の Compliance Manager により、コンプライアンスを合理化してリスクを軽減

コンプライアンス管理の人材不足と複雑さに加えて、お客様は、世界中で 1 日あたり数百件の更新が行われているという、更新頻度の高い増加する規制に準拠する必要性にも迫られています。さらに、規制が複雑であるため、組織が取るべき特定のアクションとその影響を知ることは困難となっています。

新しい Compliance Manager は、規制範囲を拡大するための広範な評価ライブラリ、テナント設定を検出するための組み込みの自動化、直感的なコンプライアンス管理のための段階的なガイダンスを提供します。Compliance Manager は、複雑な規制要件を特定の制御に変換し、コンプライアンス スコアを通じて、コンプライアンスの定量化可能な測定を行います。現在一般的に利用可能な新しい Compliance Manager は、既存の Compliance Manager とコンプライアンス スコアのソリューションを Microsoft 365 コンプライアンス センターに統合します。

現在では、Compliance Manager ですぐに使用できる 150 を超えるスケーラブルな評価のライブラリにアクセスできるため、お客様は業界および地域固有の要件に対処すると同時に、1 つのアクションで複数の要件を満たすことができます。

お客様には、Microsoft 365 の機能を超える独自のコンプライアンスのニーズもあります。カスタム評価の柔軟性により、お客様は Microsoft 365 の能力を超えてコンプライアンス管理を拡張し、特定のコンプライアンス ニーズを満たすことができます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.2.2 新しいコネクタや API による Microsoft 365 のコンプライアンス エコシステムの拡張。Microsoft Cloud App Security (MCAS) に拡張されたデータ損失防止機能のパブリック プレビュー

Microsoft 365 Compliance の機能は、Globanet および TeleMessage と連携したサードパーティコネクターの一般提供、およびMicrosoft Teams Data Loss Prevention (DLP)、Teams Export、eDiscovery 自動化を含む新しい Microsoft Graph API で拡張されています。

Microsoft は、最近のセキュリティに関する意思決定者のアンケート調査で、データ漏洩がリモートおよびハイブリッドの作業シナリオにおける最大の懸念事項であることを発見しました。どこにいてもデータの可視性を高めるために、Microsoft は、Globanet および TeleMessage と連携して、他のアプリから Microsoft 365 コCompliance (Microsoft Information Protection、Insider Risk Management、Communication Compliance、eDiscovery など) にデータをプルできる新しいコネクターを提供しおり、お客様がそのデータを推論し、保護し、管理するのをサポートしています。これらの新しいコネクターには、さまざまな通信事業者およびその他のコラボレーション プラットフォーム用の SMS/テキスト コネクターが含まれます。

さらに、Microsoft は Microsoft Cloud App Security (MCAS) への統合データ損失防止 (DLP) の拡張を発表し、現在公開プレビュー中です。これにより、お客様は Microsoft のデータ損失防止ポリシー実施フレームワークをネイティブ (OneDrive、SharePoint など) やサードパーティのクラウド アプリに拡張して、一貫性のあるシームレスなコンプライアンス体験を実現できます。

パートナーとお客様からの主な質問は、Microsoft 365 Compliance ソリューションにアクセスして、Symantec、McAfee、Relativity を含む幅広いコンプライアンス、セキュリティ、運用 (S

ecOps) エコシステムの一部である既存のアプリケーションやサービスと統合できる機能についてです。

これらの API はより広範な Microsoft Graph エコシステムの一部であり、次のものが含まれます。

- **Teams Data Loss Prevention (DLP) API:**サードパーティ製品が Microsoft Teams のデータ損失防止機能を統合および有効化できるようにします。
- **eDiscovery API:**ケースの作成や訴訟ホールドの通知ワークフロー全体を含む、高度な e Discovery プロセスの自動化により、ケースに関与するカストディアンと通信できます。
- **Teams Export API:**添付ファイル (ファイル リンクとステッカー)、絵文字、GIF、およびユーザー @Mentions とともに、Teams メッセージ (1:1 およびグループ チャット) をエクスポートできます。この API は、毎日の Teams メッセージのポーリングをサポートし、削除されたメッセージを最大 30 日間アーカイブできます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.2.3 Advanced eDiscovery を含む、Microsoft Teams に追加される追加のセキュリティおよびコンプライアンス機能

リモート作業への移行に伴って Microsoft Teams の使用が拡大するにつれ、お客様はシームレスな統合を求めてデータと従業員の安全とコンプライアンスを維持しています。

本日、Microsoft は Teams 向けの**カスタマーキーサポートを発表します。**Microsoft は、Teams のデータを Microsoft のデータセンターに保管して暗号化することで、Teams のデータを安全に保っています。現在、この機能を拡張して、Exchange Online、SharePoint Online、OneDrive と同様に、お客様が Teams 用の独自のキーを使用して暗号化のレイヤーを追加できるようにしています。

現在 Microsoft Teams で行われているビジネス会話の量に応じて、次のようなコンプライアンス機能も追加しています。

- **Insider Risk Management** は、現在 Microsoft Teams とのネイティブな統合を実現しており、組織内の関連する利害関係者とのケースを安全に調整し、コラボレーションおよびコミュニケーションを行います。Insider Risk management ケースが作成されると、プライベートの Microsoft Teams チームも作成され、その期間中ケースにバインドされます。この Microsoft Teams チームには、既定でインサイダーリスク管理のアナリ

ストと調査が含まれ、人事や法務などの追加の投稿者を適宜追加できます。Teams の統合により、利害関係者は次のことができます。
    - チャネルの会話を使用して、レビュー/応答アクティビティを調整および追跡します。
    - 関連ファイルと関連する証拠を共有、保存、レビューします。
- **Advanced eDiscovery** は、Microsoft Teams で共有されるライブ ドキュメントとリンクをサポートするようになりました。Advanced eDiscovery は、SharePoint や OneDrive などの保管場所からドキュメントを自動的に収集して、コンテンツを eDiscovery ケースに取り込みます。添付ファイルが収集され、レビューされ、Teams の会話とともにエクスポートされるため、お客様はドキュメントを 1 つずつ手動で検索して収集する必要がありません。
- **Microsoft Teams会議の記録の保持ポリシーにより、**お客様はインプレース ガバナンスで記録を保持および削除できます。つまり、保持ポリシーは記録が保存される場所に適用され、他の場所にエクスポートする必要はありません。この展開は 10 月に始まります。Microsoft は、キーワード クエリ言語を活用して Teams 会議の記録の保持ポリシーを作成する方法に関するガイダンスを提供します。
- Microsoft **は、一般公開で Compliance Manager に Teams 固有のアクションを**提供します。これは、保護規制と標準に合わせるために実行できるアクションの改善と導入に関するガイダンスを提供します。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください**。

5.3 ID

5.3.1 ID

5.3.1.1 Microsoft は米国国防総省の MilGears プログラムと提携して分散 ID を試験運用し、退役軍人が将来のキャリアパスを作成できるよう支援してます

Microsoft は、検証可能な資格情報を使用して、**分散 ID パイロット**で米国国防総省およびトライデント大学の MilGears プログラムと提携しています。MilGears は、サービス メンバーが将来の可能性を強調し、それらの目標を達成する方法を視覚化できるようにすることで、サービス メンバーが次のキャリア ステップを計画するのを支援します。

検証可能な資格情報は、新しい ID オープン標準に基づいて、人、組織、物に関する情報を証明するデジタル カードです。このプログラムで検証可能な資格情報を使用することで、軍の退役軍人や退職サービス メンバーが高等教育に登録し、民間人のキャリアをすぐに始めることができるようになります。

このパイロット プログラムのサービス メンバーは、検証済みのサービス記録と完了したコースのトランスクリプトを携帯電話のデジタル ウォレットに保存できるようになりました。サービス メンバーはこの記録を大学や雇用主と直接共有することができます。大学は、記録やその他の機密データを保存する負担なしに、サービス メンバーからの個人情報を数秒で検証できます。個人のプライバシーを保護し、組織の時間とリソースを節約するのに役立ちます。

これらの新機能は、既存の ID システムとシームレスに統合されます。この新しいタイプの資格情報検証を有効にするために、DoD MilGears は検証可能な資格情報を使用してデジタル トランスクリプトを作成します。サービス メンバーは自分のアカウントにログインすると、Microsoft Authenticator アプリで QR コードをスキャンし、認証情報を受け入れて、アプリにカードとして追加できます。

認証情報は現在、個人が所有しており、デバイスのローカルに保存して、大学 (現時点ではトライデント大学) または雇用主と共有できます。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください**。

—

5.3.1.2 新しい Azure AD アプリケーション プロキシ機能とパートナー統合により、事実上すべてのレガシー アプリへの安全でシームレスなアクセスが拡張されます

従業員がすべてのアプリケーションにリモートでアクセスすることは、リモートの労働力がますます一般的になりつつある時代の新しい必須事項です。しかし、レガシーで非標準のプロトコルでは、ビジネスに不可欠なアプリへの安全なアクセスが制限されます。

新しい Azure AD アプリケーション プロキシ機能は、2020 年 11 月までに追加のビルド済みの安全なハイブリッド アクセス統合によって補完され、組織は ID 管理インフラストラクチャをさらに統合し、レガシー認証プロトコルを使用するビジネス クリティカルなアプリケーションに一貫した条件付きアクセス ポリシーを適用できるようになります。

これらの新機能は次のとおりです。

1. **Azure Active Directory (AD) アプリケーション プロキシでのヘッダーベースの認証のサポートにより、**組織はヘッダーベースの認証アプリをレガシーのオンプレミス認証システムから移動し、Azure AD にネイティブに接続できます。この機能は、2020 年 11 月までに公開プレビューで利用できるようになります。
2. **安全なハイブリッド アクセス統合の拡張**により、統合 Windows 認証、ヘッダーベース、LDAP、SSH、非 HTTP 認証を必要とするレガシー アプリケーションの安全なシングルサインオンが可能になります。新たなパートナーは、Palo Alto Networks、Cisco AnyConnect、Fortinet、Strata、Kemp などです。

管理者は、Azure AD ポータルからこれらの新しい種類のアクセスを構成できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.3.1.3 Azure AD と人気の SaaS アプリ ServiceNow、Adobe 間の深い統合によるユーザー ライフサイクル管理の向上

人気のある SaaS アプリケーションを採用している組織は、Azure AD と主要な SaaS アプリ間の深い統合により、ユーザー ライフサイクル管理を簡素化する新機能を利用できます。2 つの新しい統合は以下のとおりです。

ServiceNow の次の Paris Release (2020 年 9 月のプラットフォーム更新) により、IT マネージャーおよび採用マネージャーは、Azure AD を通じて新規採用者のアプリケーション アクセスを自動的にプロビジョニングし、新規採用者およびサポート チームの生産性を向上させることができるようになります。この統合により、ServiceNow HR Service Delivery でのケースの作成から、採用マネージャーによる役割の割り当て、新しい採用者の役割に基づく IT によるア

プリケーションのプロビジョニングまで、オンボーディング ワークフロー全体が自動化されます。この統合は、2020 年 9 月 16 日に一般提供されます。この統合のセットアップ方法の詳細については、Azure AD Spoke in the ServiceNow Integration Hub を参照してください。

Adobe は、Adobe Creative Cloud、Adobe Document Cloud、Adobe Experience Cloud にまたがるコア Adobe Identity Management プラットフォームの SCIM 標準に基づく Azure AD とのアプリ プロビジョニング統合を発表しました。これには、Microsoft IT からのインサイトに基づく更新された Adobe 管理エクスペリエンスが含まれます。この統合は、2020 年 9 月末までにプライベート プレビューとして提供され、2020 年 12 月までに Azure AD および Adobe のお客様に公開されます。

お客様は、アプリ管理コンソール内でこれらの新機能を活用できます。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.3.1.4 ポリシーを大規模に管理し、セキュリティ体制を改善する Azure AD 条件付きアクセスの機能強化

条件付きアクセスは、Azure Active Directory のポリシー エンジンであり、組織がセキュリティと生産性の適切なバランスのためにきめ細かい適応型アクセス制御を設定するのに役立ちます。新しい機能は、新しいインサイト、自動化、総所有コストの削減により、ユーザーをより包括的かつ大規模に保護します。

会社のデータを安全に保ちながらリモート作業をすばやく有効にすると、ID とアクセス管理に新しい課題が生じ、これまでの課題が拡大します。組織は、アクセス ポリシーを迅速かつ大規模に展開し、そのカバレッジに自信を持つ必要があります。

新しい条件付きアクセス機能は、管理者がこれらの課題を乗り越え、さらなるインサイトを提供し、適切なアクセス ポリシーを大規模かつ自信を持って実装できるようにします。次の機能があります。

- **Microsoft Graph の**条件付きアクセス API は、条件付きアクセス ポリシーのすべての側面をコードとして管理し、より大きなスケールと自動化を実現します。
- **インサイトと推奨**が、適用される条件付きアクセス ポリシーの Azure AD アドバイザー ツールで利用できるようになり、管理者がポリシー カバレッジのギャップを理解し、問題をトラブルシューティングできるようになりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

タグ:条件付きアクセス、Azure Active Directory、Microsoft ID

5.3.2 Azure のセキュリティ

5.3.2.1 Azure Security Center の機能強化には、Azure Arc、Azure Defender、Azure Security Center インベントリによるマルチクラウド ポスチャー管理が含まれます

Azure Security Center のセキュリティ ポスチャー管理が拡張され、Azure だけでなく、Google Cloud および Amazon Web Services のセキュリティ ポスチャーを可視化できるようになりました。これにより、Azure Security Center からの統合されたマルチクラウド クラウドセキュリティ ポスチャーのプレビューが可能になります。

Azure Security Center の脅威保護サービスは、Azure Defender に名称変更され、Azure Security Center 内で新しい Azure Defender 拡張検出および応答ダッシュボード エクスペリエンスが提供されます。お客様は保護されている Azure リソースをすばやく確認し、保護をアップグレードしてすべてのクラウド リソースが保護されていることを確認できます。Azure Defender に Azure Key Vault の保護が含まれるようになりました。Azure Defender は、オンボードと管理を簡素化するために Azure Arc を使用する仮想マシンのサポートに加えて、SQL Server のオンプレミス保護とマルチクラウド保護もサポートするようになりました。これで、SQLデータベースと仮想マシンがどこにあるかに関係なく、すべての保護を表示できるようになります。

さらに、新しい資産管理エクスペリエンスである Azure Security Center インベントリが利用可能になり、特定のリソースを見つけやすくなりました。

この更新については、こちらの詳細をご覧ください。

5.3.2.2 ユーザーとエンティティの動作分析、脅威インテリジェンスの機能強化など、Azure Sentinel の新しいイノベーションで脅威の先を行く

クラウドネイティブのセキュリティ情報およびイベント管理（SIEM）ソリューションである Azure Sentinel は、組織がセキュリティ運用を最新化するのに役立ちます。新しい分析、脅威インテリジェンス、およびデータ収集機能により、防御側は、急速に進化する脅威と効率よく戦うことができます。

最新のイノベーションには、Microsoft の実績のある UEBA プラットフォームを利用した組み込みの行動分析が含まれています。これは、異常を特定し、脅威のハンティングと検出に関する行動のインサイトを抽出するのに役立ちます。インサイトは複数のデータ ソースにわたって集約され、統一されたホストまたはユーザー プロファイルを提供します。高度なデータ分析のために独自の ML モデルを持ちたいお客様のために、Azure Sentinel は Azure Machine Learning Jupyter ノートブックと統合し、Azure Databricks を使用して ML のフレームワークとクラウドスケールのデータ パイプラインを提供しています。

その他の新機能により、お客様は脅威インテリジェンスを簡単に管理できます。たとえば、脅威インジケーターを検索、追加、追跡し、脅威のハンティングと検出のためのウォッチリストを作成できます（例: 制限付き IP、信頼できるシステム、重要な資産、危険なユーザー、脆弱なホスト）。Azure Sentinel は、Microsoft Teams、Microsoft 365、その他のクラウドおよびデータ収集パイプライン向けの新しいコネクターを提供し続けています。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください**。

6.Windows、Edge およびデバイス

6.1 Windows

6.1.1.更新により、C# .NET5 開発者が Windows ランタイム コンポーネントを構築することが可能に

CsWinRT ツールの更新により、C# .NET5 開発者が Windows ランタイム コンポーネントを構築することが可能になりました。

9 月にパブリック プレビューで公開されるこの更新により、C# で、C++、Rust、JavaScript、Python など、Windows ランタイムをサポートする他の言語で簡単に使用できる Windows ランタイム コンポーネントを作成できるようになります。ツールのサポートに加えて、今回の更新では .NET 以外の環境でそれらのコンポーネントをホストするためのサポートも含まれる予定です。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください**。

6.1.2.新しい MSIX 機能により、アプリの開発と更新を簡素化

MSIX の新機能により、アプリの共有と更新がより簡単かつ迅速に行えるようになり、アプリ開発のワークフローが統合できるようになりました。

多くの基幹業務アプリは、プロセス間通信のために共有ファイルまたは Windows レジストリ設定に依存しています。MSIX では、ユーザーがアプリを単一の MSIX コンテナーではなく共有コンテナーにデプロイできるようになりました。この新機能は、今年後半にプレビューされる予定です。

サードパーティの Web サイトから配布される MSIX アプリのための新しい組み込み更新サービスにより、開発者はアプリを簡単に最新の状態に保つことができます。開発者は、MSIX パッケージで更新設定に関するメタデータを提供するだけで、Windows が定期的に更新を探し、サードパーティーのサイトに接続してアプリをアップデートします。このサービスは、来年初めにプレビューされる予定です。

MSIX チームは、MSIX パッケージの構築、パッケージ化、署名、およびデプロイを自動化し、簡略化する Azure DevOps 拡張機能もリリースしています。MSIX として Azure Pipelines にパッケージ化する必要があるアプリの構築ワークフローと展開ワークフローを統合するのは時間がかかる場合があります。今年後半にリリースされる新しい拡張機能は、そのプロセスを合理化し、シンプルで直感的に使用できるようにします。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください**。

6.1.3.クラウドフレンドリーな Windows アプリ開発を可能にする NuGet パッケージ

開発者からの要望に応えて、Windows SDK チームは、よりクラウドフレンドリーな方法で継続的インテグレーション/継続的デリバリー (CI/CD) パイプラインで Windows アプリを構築できる NuGet パッケージをリリースします。

Windows SDK は、C#、C++、および SDK ビルド ツール用の NuGet パッケージを提供し、開発者は完全な Windows SDK をインストールする代わりに、CI/CD パイプラインで参照できるようになります。現在この機能はパブリック プレビュー中で、今年後半には一般提供される予定です。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください。**

6.1.4.React Native for Windows の最新バージョンで、デバッグなどがより容易に

クロスプラットフォームのモバイル アプリケーション フレームワークである React Native for Windows の最新バージョンが公開されました。

バージョン 0.63 では、ネイティブ モジュールの自動リンク、モジュール間通信を可能にするサービス、LogBox 機能を利用したデバッグの改善などの新機能が追加されています。

開発者は、シンプルなコマンド ライン ツールを使って、React Native で新しいWindows アプリを作成したり、既存のアプリをバージョン 0.63 に更新することもできます。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください。**

6.1.5.Windows Subsystem for Linux の新機能により、パフォーマンスが向上し、インストールが容易に

Windows Subsystem for Linux (WSL) の新機能により、パフォーマンスが向上し、アプリのサポートが強化されて、これまで以上に簡単に使用を開始できるようになります。

WSL 2 の配布版のサポートは、Windows 10 バージョン 1903 以降の x64 ベースのシステムで利用可能になりました。これは、旧バージョンの Windows ユーザーも、Windows 10 バージョン 2004 と同様に、高速なファイル パフォーマンス速度とシステム コールの完全な互換性をご利用いただけることを意味します。

WSL on Insider ビルドでは、Linux のグラフィカル ユーザー インターフェース (GUI) アプリのサポートの初期プレビューも導入されます。Ignite 2020 から数週間以内に利用可能になるこの機能により、開発者は Linux アプリをシームレスにワークフローに組み込むことができるようになります。

また、“wsl --install” を実行するだけで WSL を完全にインストールできるようになり、新規ユーザーが WSL を試したり、経験豊富なユーザーが任意のマシンに WSL サポートを追加したりすることが容易になりました。

詳細については、Windows Command Line のブログと Microsoft Docs にある Windows Subsystem for Linux をご覧ください。

6.1.6.Windows Terminal の新機能により、生産性が向上し、ナビゲーションが簡単に

Windows Terminal Preview はハイパーリンクをサポートしており、ユーザーはターミナル内のリンクをクリックしてデフォルトのブラウザで開くことができます。

Windows Terminal Preview では、ハイパーリンクに加えてジャンプ リストが追加され、ユーザーがスタート メニューやタスク バーから特定のプロファイルでターミナルを開くことができるようになります。

さらに、Windows Terminal 用の新しいコマンド パレットでは、すべてのコマンドを 1 か所で表示してアクセスできるため、ユーザーはターミナルを簡単にナビゲートして操作することができます。このパレットは、これまで Windows Terminal Preview でのみ利用可能でした。

詳細については、Windows Command Line のブログと Microsoft Docs にある Windows Terminal をご覧ください。

6.2 Edge

6.2.1.Microsoft Edge がパブリック プレビューで Linux に登場。セキュアなリモート作業のサポートが強化され、開発者は Microsoft Edge を任意の Windows アプリに導入することが可能

IT 専門家や開発者から Web サイトのテストをサポートするようリクエストされていた Microsoft Edge on Linux は、10 月にパブリック プレビューが公開される予定です。

Microsoft Edge は、IT 専門家向けに 2 つの新しいエクスペリエンスを備えた、より安全なリモート ワーク機能を提供しています。1 つはモバイル アプリケーション管理 (MAM) の利用で、IT 管理者はユーザーのデバイス全体を管理するのではなく、ユーザーのデバイス上で個々の業務関連アプリを選択的に管理することができます。IT 管理者は、ID に基づいて、Microsoft Edge の業務プロファイルからユーザーが行った閲覧を管理することができます。

さらに、Microsoft Edge は、Microsoft 365 のサービス全体で機密性の高いアイテムを検出して保護するために使用される一連の機能である Microsoft Endpoint Data Loss Prevention (DLP) のポリシーをネイティブにサポートしている初のブラウザです。DLP により、Microsoft Edge からアクセスした場合にデータを管理および制御できるようになるため、Web 上での偶発的な情報の開示や漏洩を防ぐことができます。

近日中に、IT 管理者は Microsoft Edge を以前のバージョンにロール バックできるようになります。これにより、新しいバージョンを導入した際に、誤って環境内の何かを破損した場合に備えることができます。

開発者に対しては、2020 年末までに C/C++および .NET で WebView2 が利用できるようになります。利用可能になれば、どんな Windows アプリでも Microsoft Edge と Chromium の機能を使用して Web コンテンツを埋め込むことができるようになります。WebView2 は、さまざまな Windows アプリに完全な Web 機能を提供します。また OS から切り離されているため、特定のバージョンの Windows にロックされることはありません。

さらに、Visual Studio Code 用の新しい Microsoft Edge DevTools 拡張機能が一般提供され、開発者がコンテキストを切り替える際にシームレスなワークフローを実現できるようになりました。

新しい Microsoft Edge の開発を開始して以来、マイクロソフトは Web スタック全体で Chromium コミュニティの開発者と協力してきました。現在までに、マイクロソフトのエンジニアは Chromium プロジェクトに 3,700 以上の個別のコミットを提供しており、その範囲は主要なアクセシビリティ機能から、開発者ツールやブラウザの基礎までのさまざまな重点分野にわたります。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください。**

6.2.2.Microsoft Edge では、証明書ベースのデジタル署名の検証や将来のリコールのためのメモの追加など、PDF の変更を予定

Microsoft Edge では、ユーザーは PDF ファイルの証明書ベースのデジタル署名を表示および検証することができ、ドキュメントが署名者の意図した状態にあることを確認できます。また Microsoft Edge PDF ビューアでは、インタラクティブな目次が利用できるようになり、エンドユーザーが PDF 内の必要な場所にすばやく移動することができます。

ユーザーは、後で確認するために PDF にメモを追加できます。メモ機能は、ユーザーが調査を行っている場合や、PDF ファイルを使用して組織内の他のユーザーと共同作業を行っている場合に特に便利です。これらの機能は 10 月に利用可能になる予定です。

すぐに利用できるのは、Windows 10 の新しい Microsoft Search ショートカットを使用して、作業 (work) ファイルや同僚、サイトを検索する簡単な方法です。Microsoft Edge のアドレスバーに「作業 (work)」と入力し、[タブ] キーを押すだけで検索を開始できます。これは、仕事の流れを乱すことなく、業務に特化したコンテンツにアクセスするための便利な方法です。

また、更新された Enterprise New Tab ページでは、情報作業者は Office 365 のフィードに加えて、カスタマイズされた業務関連の企業や業界のニュース フィードにすべて単一のページからアクセスできるようになります。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください。**

6.3 デバイス

6.3.1.Surface Hub 2S:85 インチ モデルの更新と提供開始

Surface Hub 2S 85 インチ モデルは、2021 年 1 月から一部の市場で法人向けに出荷が開始され、一部の市場では 9 月 22 日から販売代理店による予約を開始します。この新しいモデルは、Surface Hub 2S のより大きなバージョンであり、職場の内外でのコラボレーション方法を変革するために設計された、オールインワンのチームワーク デジタル ホワイトボードです。ワンタッチで会議に参加できる Microsoft Teams 会議統合機能、Microsoft Whiteboard、およびサードパーティ製アプリのエコシステムが搭載されています。

さらに、Windows 10 Pro と Enterprise Surface Hub 2 の構成を、すべての Surface Hub ユーザーが無料で利用できるようになりました。このツールセットを使用すれば、これまで Surface Hub では利用できなかったアプリを使って生産性を最大限に高めることができ、立ったり、動き回ったりして、リモート参加者とより自然な形で会議を行うことができるようになります。

最後に、Windows 10 Team 2020 の更新がすべての Surface Hub デバイスで利用できるようになりました。Windows 10 Team 2020 の更新は、IT 統合とデバイスの展開と管理機能を改善し、すべての第 1 世代の Surface Hub と Surface Hub 2S デバイスでの会議やコラボレーション体験を向上します。この更新は、10 月に無料で提供されます。

この更新については、**こちらの詳細をご覧ください。**